ハヤテでドラゴンクエスト?

かぐや姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテでドラゴンクエスト？

【Ｎコード】

Ｎ１７５３Ｐ

【作者名】

かぐや姫

【あらすじ】

ハヤテのごとく！のキャラがドラゴンクエスト？の世界の勇者一行となり世界を救う話です。

プロローグ（前書き）

初めまして、かぐや姫と申します。
下手な文章ですが書かせていただきます。

プロローグ

ハヤテ「ここは・・・何処でしょうか？」

ハヤテは気がつくと見たことがない滝の前にいた。

ハヤテ（おかしいな・・・僕の記憶では滝の前で寝た記憶はない・・・・・・あ、夢か）

声『ハヤテ・・・・・・ハヤテ・・・・・・私の声が聞こえますね・・・』

ハヤテ（うん、何か幻聴まで聞こえるし間違いなく夢だ）

声『夢でも幻聴でもありません。全て紛れもない現実です』

ハヤテ（心を読まれた！？）

声『私は全てを司る者。貴方の考えていることは全てわかります』

ハヤテ（・・・・・・まぁ、夢だしいいか）

声『はぁ・・・貴方は人の云う事を信じないのですね・・・・・・まぁ良いです。どうせ後で信じざるおえなくなるのですから』

ハヤテ「で、何ですか？どうせ夢ですし話くらいなら聞きますよ」

声『では話しますが、貴方はこれから、目覚めた世界で勇者となり、その世界の悪を挫く旅に出る事になるでしょう』

ハヤテ「はぁ、勇者で悪を挫くですか・・・お嬢様が聞いたら喜びそうな話ですね」

声『そして世界を救い再び、私のもとへ真の勇者として訪れる事でしょう』

ハヤテ「世界を救う・・・・・・僕には縁がない話だと思いますけどねぇ」

声「再び目覚めたときに解りますよ・・・・・・さあ、そろそろ夜が明ける頃。貴方もこの眠りから目覚める事でしょう・・・・・・私は全てを司る者。いつの日か、再び貴方に会えることを楽しみに待っています・・・・・・・・・・・・」

刹那、ハヤテの意識は途切れた。

プロローグ（後書き）

下手で短いですけど、私は暇人なので更新速度は速いと思います・・・・・・たぶん。

第一話「旅立ちのアリアハン」

女性「ハヤテ・・・ハヤテ、起きなさい」

ハヤテ「ん・・・・・・・あれ・・・ここは」

ハヤテが再び目覚めると、そこは三千院家の屋敷の自室ではなく中世のヨーロッパのような作りの部屋だった。

女性「おはようハヤテ、もう朝ですよ」

ハヤテ「・・・・・・あの、ここは何処ですか・・・・・・それに貴女は誰で・・・・・・」

女性「何を云っているのですか？ここは貴方の家で私は貴方の母ですよ。いつまでも寝ぼけていてはいけませんよ」

ハヤテ「えっ・・・・・・・・・・・・・？」

ハヤテ（おかしいな・・・・・・僕の母は確か僕に借金を押し付けて蒸発したはず・・・っていうかこんな部屋で寝た記憶もない）

母「今日はとても大切な日。ハヤテが王様に旅立ちの許しを頂く日だったでしょ？この日の為にお前を勇敢な男の子に育て上げたつもりです」

ハヤテ（ま、まさかあの夢で云っていたのって本当の事だったのか！？で、でもそんな莫迦話があるわけが・・・・・・・・）

母「さあ、母さんについていらっしゃい」

ハヤテ「は、はぁ・・・・・・・・・」

ハヤテ（と、とりあえずついて行ってみよう・・・・・・）

移動中――――――――――――――――――――

ハヤテ「こ、これは・・・・・・・・・」

ハヤテが母についていくとこれまた中世のヨーロッパのような大きなお城についた。

母「ここから真っ直ぐ行くと、アリアハンのお城です。王様にちゃんと挨拶するのですよ。さあ、いってらっしゃい」

ハヤテ（流れでここまで来てしまったけど・・・・・・入って大丈夫なのか・・・・・・？）

ギィィ・・・バタンッ

ハヤテ「お・・・おじゃします・・・・・・？」

恐る恐る城の中に入ると、兵士と思われる人物が近付いてきた。

兵士「ようこそアリアハンのお城へ！おお、誰かと思えばハヤテ殿ではありませんか！さあ、王様がお待ちです。ついてきてください！」

ハヤテ「あっ、はい・・・・・・」

ハヤテ（よく解らないけど・・・やっぱり取り敢えず着いていこう・・・・・・）

ギイィ・・・バタンッ

兵士についていくと、三千院家より大きな扉を開け、如何にも王様と解る人物の前にたどり着いた。

兵士「王様！ハヤテ殿をお連れ致しました！」

王様「うむ、大儀であるぞ。そして、よくぞ来た！勇敢なるイクサの弟ハヤテよ！」

ハヤテ（えっ、兄さん！？）

王様「そなたも母から聞いていると思うが、そなたの兄、イクサは戦いのすえ行方不明になってしまった。しかし、その兄を探すと同時に兄のあとを継ぎ、旅に出たいというそなたの願いしかと聞き届けたぞ！」

ハヤテ（・・・・・・まさか兄さんまでこの世界に来たなんて事は・・・・・・ありそうで怖い）

王様「そなたならきっと、兄の意志を継ぎ、世界を平和に導いてくれるであろう。敵は、魔王バラモスじゃ！世界の殆どの人々は今だ魔王バラモスの名前すら知らぬ。だが、このままではやがて世界は、魔王バラモスの手に・・・・・・・・・それだけはなんとしても食い止めなければならぬ！ハヤテよ、魔王バラモスを倒してまいれ！」

ハヤテ「は、はいっ！」

ハヤテ（しまった・・・つい反射的にはいって云ってしまった・・・・・・）

王様「うむ、良い返事で儂も安心じゃ。しかし一人ではそなたの兄、イクサの二の舞になってしまうやもしれぬ・・・・・・町の酒場で仲間を見つけ、これで仲間達の装備を整えるがよかろう。大臣！」

大臣「はっ！ハヤテ殿これを」

ハヤテ「あ、ありがとうございます」

ハヤテは５０ゴールドと聖水と武器と防具を手に入れた！

王様「ではまた会おう！ハヤテよ！」

第二話「初めての戦い？」（前書き）

携帯だと読みにくい部分があるかも知れません・・・・・・

第二話「初めての戦い？」

お城を出て王様の云っていた酒場までの道のり。

ハヤテ（って云うかこれは夢じゃないのか・・・・・・？）

徐に自分の頬っぺたを抓るハヤテ。

ハヤテ（痛い・・・・・・じゃあこれは夢じゃないのか・・・・・・確かあの夢に出てきた声は僕が勇者で世界を救うとか云っていたよな・・・・・・いやいや・・・普通に無理だろ・・・・・・）

男1「テメェ等いい加減にしろよ！」

ハヤテがそんな事を考えていると、向こうの方から云い争いと思える声が聞こえてきた。

ハヤテ「？」

女性1「でしたら今すぐ私の視界から消えてくださいませんか？」

男2「チッ！ガキだからっていい気になってんじゃんぇぞ！」

女性2「そのガキ相手に本気になっているお前達もどうかと思うがな」

ハヤテが争いの方をよく見てみると、其処にいたのは男が二人と金髪の女性の二人だった。

ハヤテ（・・・・・・・まさかあの二人は・・・・・・・）

ハヤテ「あの・・・ちょっといいですか？」

男1・2「あぁ！？なんだお前は？」

女性1・2「あっ、ハヤテ！！」

ハヤテ「はぁ・・・やっぱりお二人でしたか・・・・・・お嬢様にアーたん」

女性二人はハヤテのよく知るナギとアテネだった。

男1「お前、こいつ等の知り合いか？」

ハヤテ「ええ・・・そうですけど・・・・・・」

男1「ふんっ、だったら丁度いい。こいつ等の落とし前を付けてもらおうじゃないか！」

ハヤテ「えっ？ちょっと！」

ごろつきが現れた。

ハヤテ
HP25　　→たたかう
MP　6　　にげる
勇　1　　さくせん

ハヤテ「・・・・・・なんですか？上のは・・・・・・」

ナギ「普通に戦闘のコマンドじゃないか？」

アテネ「ふふん、そう云うことなら私も加勢しますわハヤテ」

ハヤテ「えっ？アーたん戦えるの？」

アテネ「私が貴方に剣術を教えたのを忘れたのかしら？」

ハヤテ（確かにアーたんなら何でも出来そうだな・・・・・・）

アテネ	ナギ
ＨＰ１５	ＨＰ　２
ＭＰ２５	ＭＰ２０
魔戦　３	遊　５

ハヤテ「って、何なんですかお嬢様のステータスは！？ＭＰは良いですけど、ＨＰ２ってスライムが相手でも一撃で死ぬじゃないですか！？しかもやっぱりお嬢様は遊び人なんですね！？」

ナギ「遊び人を馬鹿にするな！いざ遊び人究極魔法！パ　ル　プ　ン　テ！！」

ナギが呪文を詠唱すると不思議な音とともに辺りが光に包まれた。

男１・２「なっ！き、消えた！？」

光が収束すると、ハヤテ達はそこにはいなかった。

第三話「迷子の勇者一行」

ドサッ！

ハヤテ「痛たたた・・・・・・・えっと、お嬢様にアーたん、怪我はない？」

アテネ「大丈夫ですわ」

ナギ「ああ、さっきの呪文でＭＰは切れたがそれ以外は大丈夫だ」

ハヤテ「そうですか・・・・・・・それにしてもここは何処でしょうか・・・・・・？」

ハヤテ達が着いたのは、見渡す限りの草原だった。

アテネ「解りませんわ・・・恐らくナギさんの呪文で何処かに飛ばされたのだと思いますけど・・・・・・」

ナギ「パルプンテは使うまで何が起こるか分からない呪文だからな！」

アテネ「威張らないで下さい。ただでさえ訳の解らない世界に来て土地勘が無いと云うのに、これ以上ややこしくしないで欲しかったですわ」

ナギ「わ、私の所為だと云うのか！？」

ハヤテ「ま、まぁお二人とも落ち着いて・・・・・・とりあえず僕

としてはどうしてお二人がこの世界にいるのか聞きたいのですが・・・・・」

アテネ「それは此方が聞きたいくらいですわ。夢の中で変な声に、勇者の仲間として世界を救えだとか云われて、目が覚めたらさっきの国のお城の中にいたんですもの」

ナギ「私もだよ・・・私も夢の中で変な声の話を聞いて、気がついたらさっきの国の宿屋にいたんだ」

ハヤテ（二人も同じ夢を・・・・・・・・・）

ハヤテ「で、それは解りましたけど・・・・・・どうしてあんな所で云い合いをしていたのですか？」

アテネ「それは・・・・・あのごろつき達が酒場の前にいて邪魔だったからですわ」

ナギ「あぁ、邪魔で入れなかったからな」

ハヤテ「そ、そうですか・・・・・・」

ハヤテ（邪魔だからって男2人に喧嘩を売るって・・・・・・まぁ二人らしいとは思うけど・・・・・・）

アテネ「まぁ、そんなことはもうどうでもいいですわ。とりあえず国でも町でも、どこか人のいる所を探しましょう。詳しい話はそれからですわ」

ハヤテ「そうだね」

ナギ「むぅ・・・・・・・・・？」

ハヤテ「どうしましたお嬢様？」

ナギ「さっきから気になっていたのだが・・・・・・どうしてお前はアテネに対してタメ口なんだ？しかもさっきアーたんとか呼んでいたよな？」

ハヤテ「えっ・・・・・・それはですね・・・・・・」

アテネ「ふふっ、それは勿論、ハヤテと私が『そういう』関係だからに決まっているじゃないですか？」

ハヤテ「なっ、あ、アーたん！？／／／／／／」

アテネ「あら？ハヤテは私では不満だとでも云うのかしら？」

ハヤテ「そ、そう云うわけじゃないけど・・・・・・／／／／／／／／」

ナギ「なん・・・・・・だと・・・・・・」

アテネ「ふふん、そう云う事だから、貴女は早々にハヤテの事を諦めるべきですわ♪」

ナギ「くっ・・・・・・私は絶っっっ対に諦めないからなーーーーーっ！！！」

ハヤテ「お、お嬢様！無闇に走っては危険ですよ！！」

ナギは逃げ出した。

しかしまわりこまれてしまった・・・・・・・・・モンスターに。

ナギ「なっ・・・いつの間に！？」

スライムが現れた。

ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ　０
遊　５

ナギ（・・・これで私にどうしろと・・・・・・？って云うかＨＰが満タンでも常時画面が赤って私の能力、酷過ぎないか・・・・・？）

↓たたかう
　にげる
　さくせん

↓こうげき
　じゅもん
　ぼうぎょ
　どうぐ
　そうび

↓スライム

ナギの攻撃！

ミス！スライムはダメージを受けない！

ナギ（えぇー・・・・・・・・スライムにもダメージを与えられないのかよ・・・・・・ってか、まずいな・・・本当にスライムの攻撃一発で死んでしまうぞ・・・・・・）

スライムの攻撃！

ナギ（くっ・・・・・・もう駄目だ・・・・・・）

ハヤテに2のダメージ！！

ハヤテはナギを庇っている！

ナギ「えっ・・・・・・？ハ、ハヤテっ！！」

ハヤテ「大丈夫ですかお嬢様・・・・・・ですから危ないと申したじゃありませんか」

ナギ「す・・・すまん・・・・・・」

アテネ「全く・・・本当に困ったお嬢様ですわね」

ナギ「ア、アテネ・・・・・・・・」

アテネはメラを唱えた！

スライムに9のダメージ！！　スライムをやっつけた！

それぞれ1ポイントの経験値を獲得！　2ゴールドを手に入れた！

ナギ「アテネ・・・・・・あ、ありがとう・・・・・・」

アテネ「べ、別に貴女の為ではありませんわ。ただ、貴女が死んでしまってはハヤテが悲しむから助けただけですわ！」

ハヤテ「素直じゃないねアーたん。お嬢様が走って行って物凄い慌ててたのに・・・」

アテネ「ハヤテ・・・・・・」

アテネからハヤテに対してただならぬプレッシャーが。

ハヤテ「ア・・・アーたん・・・・・・怖いよ・・・・・・」

アテネ「とにかく！さっきの話は冗談ですから気にしないことですわナギさん」

ナギ「えっ・・・・・・じょ、冗談だったのか！？」

アテネ「ええ、残念ですが冗談ですわ。ハヤテが私にタメ口なのは昔からの知り合いと云うだけですわ・・・・・・それに・・・」

ナギ「それに・・・・・・？」

アテネ「私とハヤテがそういう関係だったとしたら、間違いなく貴女の執事はやっていませんわ」

ナギ「た、確かにそれもそうか・・・・・・って、残念？」

アテネ「えぇ、残念ですわ。私とハヤテは本当に相思相愛なのに恋人同士でないなんて・・・・・・まぁ、ですから、諦めろと云ったのは冗談ではありませんわよ？」

ナギ「な、ななな・・・・・・ハヤテ！それは本当なのか！？」

ハヤテ「えっ！・・・・・・いやその・・・・・・／／／／／／／／／／」

ナギ「は・・・・・・」

ハヤテ「・・・・・・は？」

ナギ「ハヤテのバカーーーーーーーっ！！！」

ナギの攻撃！　会心の一撃！！

ハヤテ「！！！！！！！！！」

ハヤテに22のダメージ！！

ナギ「さっきも云ったが、絶っっっっっっ対に諦めんぞ！」

アテネ「ふふっ、それは貴女の勝手ですわ」

ハヤテ「アーたん・・・・・・で、出来れば回復魔法を・・・・・・・・・」

アテネ「生憎ですけど私は魔法戦士ですから回復魔法は使えませんわ」

ハヤテ「それなら魔法戦士は攻撃魔法も使えないはずじゃ・・・・・・・・」

ナギ「ふんっ・・・・・・・・・・ん？おい、あっちに見えるのって城じゃないか？」

ナギの指さす方を見ると、確かに小さくだが城の様なものが見えている。

アテネ「そのようですわね・・・・・・ですけど・・・あの国着くまでに全滅しないといいですわね」

ナギ「あー・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ
ＨＰ　１
ＭＰ　６
勇　　１

アテネ
ＨＰ１５
ＭＰ２３
魔戦　３

ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ　０

遊　5

ナギ「何ていうか・・・・・・殆ど私のせいとは云え・・・これは酷いな」

アテネ「自覚があって良かったですわ」

ハヤテ「あの・・・これを使えば何とかなるかと・・・・・・・・・」

ハヤテが出したのは、王様からもらった聖水だった。

ナギ「これは聖水じゃないか！これがあれば結構近くまでいけるかもしれないな！」

アテネ「多少の敵なら私が片付けますわ」

第四話「ロマリアのお城」（前書き）

前回の話で書かなかったんですけど、ハヤテとナギの誤解は解けています。

第四話「ロマリアのお城」

ナギ「なんとか着いたな・・・・・・」

アテネ「えぇ・・・最後の最後で聖水の効果が切れた時は少し焦りましたけどね」

ハヤテ「とりあえず宿屋に行こうよ・・・・・・・・」

そう云って宿屋の方へ向かったのだが・・・・・・・・

兵士「おお！もしやあなた方はアリアハンから参られた御方では？」

ハヤテ「え、えぇそうですけど・・・・・」

兵士「お待ちしておりました！さぁ、まずは王様に拝謁を！！」

ハヤテ「えっ、ちょ、ちょっと！」

ハヤテ達はお城の中へ半ば無理やり連れて行かれた。

王の間――――――――――――。

王様「よくぞ来た！勇者イクサの噂は我等も聞き及んでおるぞよ」

ナギ「よくぞ来たって、無理やり連れてこられたけどな」

若干不機嫌になっているナギがジト目で云う。

王様「兵士の無礼は謝ろう。済まなかった・・・・・・じゃがこれもそなた達に一刻も早く頼みごとを伝えたかったからなのじゃ」

アテネ「頼みごと？」

王様「うむ、一週間ほど前にカンダタと云う者がこの城からあろうことか儂の金の冠を奪って逃げたのじゃ・・・・・・そして何人もの勇敢な者達がカンダタの元へ向かったのだが全く歯が立たなかった・・・・・・」

ハヤテ「では、その金の冠を僕達に取り返して来いと仰るのですか？」

王様「そうじゃ。実は三日ほど前にもピンクの髪の勇敢な女剣士が出立したのだが全く音沙汰がなくての・・・・・・これはもう勇者に縋るしかないと思った訳なんじゃ・・・・・・」

ハヤテ・ナギ・アテネ（ピンクの髪の勇敢な女剣士ってまさか・・・・・・・・）

三人の頭の中には同一の人物が思い浮かばれた。

ハヤテ「王様・・・もしかしてその女剣士って、ヒナギクって名乗っていませんでしたか？」

王様「む？確かにその女剣士はヒナギクという名じゃったが・・・・・・もしや知り合いだったのか？」

王様の答えによって予想が確信に変わる三人。

アテネ「まさかヒナギクまでこっちの世界に来ていたのですか・・・・・」

ナギ「でもさっき三日前って云ってたよな？ヒナギクだけ早くこっちに来たってことなのか？」

ハヤテ「まぁ、細かい事はヒナギクさんと合流してからにしましょう」

王様「とにかく頼んだぞ勇者ハヤテよ！だが今日はもう日も暮れる頃。今晩は我が城で存分に休むと良い！大臣、ハヤテ達に部屋と夕食を用意するのじゃ！」

大臣「はっ！では此方に・・・・」

そして夕食後、ハヤテに宛がわれた部屋――――――――――――――――――。

アテネ「で、やっと落ち着けたので状況を整理したいのですけど」

ナギ「整理も何も、良くある目が覚めたら異世界にいましたたって展開じゃないか？」

ハヤテ「いやまぁ、そうなんですけどね・・・」

そうだとは思うがそう云っては身も蓋もないと思うハヤテ。

ナギ「流れ的にもどうせ魔王を倒さないと元に戻れないだろうな」

ハヤテ「随分冷静ですねお嬢様・・・・・・・・・」

ナギ「いやいや冷静なんかじゃないぞ？内心ワクワクしてるぞ？だって異世界で勇者だぞ、魔王だぞ！？こんな体験一生に一度あるかないかじゃないか！！」

キラキラした目で云うナギ。

ハヤテ「あぁ・・・もう既に楽しんでいらっしゃるのですね・・・・・・」

アテネ「まぁ実際、その魔王とやらを倒さないと元の世界には戻れないでしょうね・・・・・・ま、それならナギさんのようにこの状況を楽しむと云うのもアリですわね」

ハヤテ「そ、そう云うものなのかな・・・・・・・・・・・・？」

アテネ「えぇ、ですからハヤテもあまり深く考えないことですわ。それで差当っての目標は王に云われた通りカンダタとか云う盗賊の討伐ですわね」

ナギ「後、ヒナギクとの合流だな」

アテネ「そうね。王の話を聞く限りほぼ間違いなくヒナギクも私達と同じようにこの世界に来ている筈ですからね」

そう云いながら徐に古ぼけた紙を取り出すアテネ。

ナギ「む？アテネ、何だそれは？」

アテネ「世界地図よ？」

さも当然でしょう？と云うように云うアテネ。

ハヤテ「世界地図よ？っていつの間にそんな物を・・・・・・？」

アテネ「最初の国にいたあのごろつきの一人から掏らせてもらったのよ。どうせ碌な使い方しないだろうと思ったから」

ハヤテ「あ・・・うん、やっぱりアーたんは凄いね・・・」

アテネ「それと、地図を掏ったときに一緒にこんな鍵も付いてきたのよ。よく解らないけど役に立つかもしれないからハヤテに預けておくわね」

アテネは謎の鍵をハヤテに手渡した。

ハヤテは盗賊の鍵を手に入れた！

ハヤテ「なんかさっきから随分都合がいいね・・・・・・・・」

アテネ「それも気にしないことですわ。そんな事より明日はまずこのカザーブという村に向かいましょう」

ナギ「カザーブ？って云うか、そもそも私達は今何処にいるんだ？」

アテネ「今いるのはこのロマリアと云う所でカザーブはこの北にあ

る村よ」

アテネが地図を指さしながらナギとハヤテに位置を説明する。

地図には本物の世界地図とよく似た地形が描かれ、ハヤテ達のいるロマリアは大体イタリアのある場所に位置している。

ナギ「ふーん、じゃあ明日に備えてそろそろ寝るか」

アテネ「そうね。じゃあおやすみなさいハヤテにナギさん」

そう云って自分の部屋に戻ろうとするアテネだが・・・・・・・・

ハヤテ「おやすみアーたん」

ナギ「ゆっくり休めよー」

アテネ「・・・・・・・・ちょっと待ちなさい。何で貴女はハヤテの部屋で寝ようとしているんですか！？」

普通にハヤテと寝ようとしているナギについ声を荒げてしまったアテネ。

ハヤテ「あぁ、お嬢様は何時もメイドのマリアさんと寝てるから一人じゃ寝ないんだよ」

ナギ「ちょ、何、恥かしいこと云ってんだよお前は！？／／／／／／／」

ハヤテの発言に真っ赤になるナギ。

アテネ「だ、だからってハヤテと添い寝なんて許しませんわ！ずるいです！！」

ハヤテ「えっ？あ、アーたん？」

嫌な予感しかしないハヤテ。

アテネ「貴女がハヤテと一緒に寝ると云うなら私もハヤテと一緒に寝ます！！」

ハヤテ「ええ！？アーたんそれは不味いような気が・・・・・・・・・・」

ナギ「むぅ・・・・・・しょうがないな勝手にすればいい」

ハヤテ「お嬢様！？勝手にすればいいって僕の意思は！？」

アテネ「さぁ、貴方の主人の許しも出たし早く寝ましょうハヤテ♪」

ハヤテ「あの・・・だから僕の意思は・・・・・・？」

抵抗むなしく、二人に抱きつかれるような形で寝る事になったハヤテ。

アテネ「あぁ・・・久しぶりにハヤテと添い寝なんて夢のようですわ♪」

ナギ「うむ。やはりハヤテは温かいな♪」

ハヤテ（魔王に勝つよりもこの誘惑に勝つ方が難しいかもしれない・・・・・・・・）

第四話「ロマリアのお城」（後書き）

全体的に下手ですけど、最後は特に酷い気がしますね・・・・・・・・・・・・

もっと文才が欲しいです・・・・・・・・・・

第五話「初めての戦い・改」

翌日

ハヤテ達は朝早く、カンダタ討伐に出るために再び王の間に集まっていた。

ハヤテ「では王様、僕達はもう出立させていただきます」

王様「うむ。じゃがそなたはあまり顔色が優れぬようじゃが・・・・・・休まなくて大丈夫か？」

ハヤテ「えぇ、唯の寝不足ですから・・・平気ですよ・・・・・・」

ナギ・アテネ「♪」

王様「なら良いが・・・・・・では最後に尋ねるがそなた達はよもや何の武器も持たずにカンダタに挑むわけではあるまいな？」

ハヤテ「武器ですか・・・・・・残念ですが武器を持ちたくても僕達は武器を揃えるお金がないので・・・・・・」

ハヤテ（一応最初にアリアハンの王様からお金と武器と防具を貰ったけど・・・・・・５０ゴールドと棍棒と旅人の服だしなぁ・・・・・・）

王様「ふむ・・・ならば我が城の武器庫にある武器の中から好きな物を持っていくが良い」

ナギ「そんなに簡単に与えてしまって良いのか？」

王様「カンダタを討伐してくれるのならば安いものじゃ。では勇者ハヤテよ！装備を整えたならば早速カンダタ討伐に向うのじゃ！儂は此処でそなたたちの武運を祈っておる。大臣、ハヤテ達を武器庫へ案内せよ」

大臣「はっ！では此方です・・・・・・・」

草原――――――――――――――――――――――――。

ハヤテ「気前の良い王様でしたね」

アテネ「ええ、お陰で十分な装備を整えられましたわ」

ロマリアのお城で装備を整えたハヤテ達は早速第一の目的地のカザーブへ向かっていたのだが・・・・・・・・

ナギ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ「お、お嬢様・・・そろそろ機嫌を直されては如何ですか・・・・・？」

アテネ「そうですよナギさん。何時までも拗ねていては損ですわよ？」

ナギ「ふんっ！お前達は良いよな装備できる武器があって！それに比べて何だよ私は、檜の棒も装備できないって！？」

ハヤテ「ま、まぁまぁ落ち着いてください・・・多分あのお城には偶々お嬢様が装備できる武器が無かったまでですよ！」

ナギ「・・・・・・本当か？」

ハヤテ「勿論ですよ！次の町に行けばきっとお嬢様が装備できる武器が有りますって！！」

ナギ「・・・・・・解った、ハヤテの云う事を信じよう」

ハヤテ（有ると良いなぁ・・・・・・）

ちなみにハヤテは鋼の剣、アテネは魔導師の杖を手に入れた。

アテネ「お話が纏まったようで助かりましたわ」

ハヤテ「どうしたの？」

アテネ「敵ですわ」

ハヤテが前を向くと目の前にはモンスターがいた。

ハヤテ「いつの間に・・・・・・？」

アテネ「貴方はもう少し主人以外にも気にかけるべきですわね」

さまようよろいが現れた。

ハヤテ「あれ？コマンドは出ないんですか？」

アテネ「あれ書くの結構面倒くさいのですよ？」

ナギ「そんなの作者の勝手じゃないか・・・・・・・・・」

さまようよろいの攻撃！

ハヤテに５のダメージ！！

ハヤテ「っと、無駄口を叩いてる場合じゃないですね・・・とうっ！！」

ハヤテの攻撃！

さまようよろいに１０のダメージ！！

アテネ「では、私も！」

アテネはメラを唱えた！

さまようよろいは９のダメージ！！

ナギ「多分無駄だと思うけど・・・うりゃ！！」

ナギの攻撃！

ミス！さまようよろいはダメージを受けない！

ナギ「もう泣きたい・・・・・・」

ハヤテ「だ、大丈夫ですよお嬢様！」

さまようよろいは仲間を呼んだ！　ホイミスライムが現れた！

アテネ「仲間ですか、面倒ね・・・ハヤテ！ナギさんのフォローは後でも出来るからどんどん攻撃しなさい！」

ハヤテ「あ、うん！」

ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！

さまようよろいに合計１７のダメージ！！

アテネはメラを唱えた！

さまようよろいに１０のダメージ！！

ナギ「そうだ！！私にも呪文があるじゃないか！！」

ハヤテ・アテネ「えっ！？」

ナギはパルプンテを唱えた！

ナギ達はこの闘いに勝ったら何時もの２倍は儲かりそうな気がした！

ナギ「・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ「げ、元気を出してください！前回より全然マシですよ！」

さまようよろいの攻撃！

ハヤテに５のダメージ！！

ホイミスライムの攻撃！

アテネに２のダメージ！！

ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！

さまようよろいに合計１７のダメージ！！　さまようよろいをやっつけた！

アテネはメラを唱えた！

ホイミスライムに１０のダメージ！！

ナギの攻撃！　会心の一撃！

ホイミスライムに３２のダメージ！！　ホイミスライムをやっつけた！

ナギ「あれ？」

ハヤテ「凄いじゃないですかお嬢様！とどめを刺しましたよ！」

ナギ「あ、あぁ！やっぱり私はやれば出来るな！！」

ハヤテ「はい！」

アテネ「まぁ、ナギさんは運が良いみたいですしね」

それぞれ１２４の経験値を獲得！

ハヤテはレベル４に上がった！
最大ＨＰが２５ポイント上がった！
最大ＭＰが１４ポイント上がった！
ハヤテの能力が増えた！
力　　＋２６
身の守り　＋３０
素早さ　　＋３０
賢さ　　＋８
運の良さ　＋０
ハヤテはホイミを覚えた！

アテネはレベル５に上がった！
最大ＨＰが７ポイント上がった！
最大ＭＰが１４ポイント上がった！
アテネの能力が増えた！
力　　＋４
身の守り　＋９
素早さ　　＋１２
賢さ　　＋２０
運の良さ　＋２０
アテネはヒャドを覚えた！

ナギはレベル７に上がった！
最大ＨＰが０ポイント上がった！
最大ＭＰが４０ポイント上がった！
ナギの能力が増えた！
力　　＋０

身の守り　＋０
素早さ　＋０
賢さ　＋１０
運の良さ　＋０

１２０ゴールドを手に入れた！

ナギ「なぁ、私だけ能力の伸びがおかしくないか？」

アテネ「今さらですけど一応３人の能力を見ておきましょうか」

ナギ「これっていじめじゃないか？ハヤテ、泣いていいか？」

ハヤテ「お、お嬢様、お気を確かに！」

ハヤテ
勇者
Ｅ鋼の剣
Ｅ執事服
最大ＨＰ：５０
最大ＭＰ：２０
力　：５６
身の守り：６２
素早さ　：７０
賢さ　：１０
運の良さ：　０

アテネ
魔法戦士
Ｅ魔導師の杖

Ｅアテネのドレス
最大ＨＰ：　２７
最大ＭＰ：　３９
力　　：　３２
身の守り：　２９
素早さ　：　６２
賢さ　　：　１００
運の良さ：　７２

ナギ
遊び人
Ｅナギの服
最大ＨＰ：　２
最大ＭＰ：　６０
力　　：　１
身の守り：　１
素早さ　：　１
賢さ　　：　９７
運の良さ：９９９

ハヤテ「色々ツッコミたい所が満載の能力ですね、特にお嬢様・・・・・・・・」

ナギ「何だよ私の能力！？ＭＰと賢さと運のよさ以外屑じゃん！？１と２って！？っていうか逆に運の良さ良すぎだよ！なんで無駄にＭＡＸなんだよ！？」

ハヤテ「僕は運の良さ０ですけどね・・・・・・」

ナギ・アテネ「それは解りきってた（わ）」

ハヤテ「そんな声を揃えて云わなくても・・・・・・・・・」

アテネ「まぁ、能力も把握できましたし行きましょう。もう村も見えてきてますし」

第六話「カザーブの村」

カザーブの村―――――――――――――――――――――。

ハヤテ「ふぅ・・・やっとカザーブに着きましたね」

あれから間もなく、ハヤテ達はこの山に囲まれたカザーブの村に辿り着いた。

アテネ「えぇ、では早速村人に聞いてカンダタの居場所の情報収集でもしましょうか」

ナギ「いや・・・その必要は無さそうだぞ」

ハヤテ・アテネ「え？」

ナギの言葉に正面を見る二人。

カンダタ子分Ａ「おらおら！命が惜しかったら大人しく金目の物と食い物を差し出しな！！」

村人「ひー！またカンダタの一味が！！」

三人の着いたカザーブは平和な村ではなく、カンダタ一味よって彼方此方の民家から火が上がり村人たちが逃げ惑っている悲惨な状況だった。

カンダタ子分Ｂ「へへっ、この娘、中々の上玉じゃねぇか」

村娘「お、御助けを・・・・・・・」

老人「な、何でもお渡ししますから・・・何卒、孫娘にだけは手を出さないで下され・・・・・・・」

カンダタ子分C「はんっ、年寄りは黙ってな」

そう云って村娘の手を強引に取り連れ去ろうとするカンダタ子分C。

村娘「きゃっ！お、お爺様！」

老人「や、やめてくだされ！！」

カンダタ子分A「うるせぇんだよジジィが！！」

カンダタ子分Aは手に持っていた剣で老人を切り伏せようとした・・・・・・が。

ガギンッ！！

カンダタ子分A「な、何っ！？」

ハヤテ「女性やお年寄りに手を出すなんて感心しませんね・・・・・・っと」

間一髪でハヤテが受け止め、老人と村娘を一緒に抱きあげて後方に飛翔した。

村娘「あ、ありがとございます／／／／／」

老人「助かりました・・・」

ハヤテ「いえいえ当然の事をしたまでです。さぁ、ここは危険ですからお二人とも早く逃げてください」

村娘「か、必ずお礼を致しますので！」

そう云って、村娘と老人は村のまだ火の回っていない方向へと逃げて行った。

カンダタ子分A「っち・・・誰だお前？」

ハヤテ「僕ですか？一応勇者らしいですよ」

笑顔で答えているが目が完全に座っているハヤテ。

アテネ「ハヤテっ！急に飛び出して無事ですか！？」

ハヤテ「あぁ、ごめんねアーたん。僕は大丈夫だよ」

ナギ「全く・・・お前は本当に仕方ないの奴だな」

アテネの後ろから顔を覗かせながら云うナギ・・・って云うかアテネにおんぶされているナギ。

ハヤテ「お嬢様もご無事で何よりですね・・・・・・」

カンダタ子分C「舐めた真似しやがって・・・お前ら俺達が誰だか解ってんのか！？」

ナギ「・・・・・・さまようよろいの色違い的な？」

カンダタ子分A「誰が色違いだ！」

アテネ「では・・・じごくのよろいの色違い的な？」

カンダタ子分B「そう云う問題じゃなくて！」

ハヤテ「・・・キラーアーマーの色違い的な？」

カンダタ子分C「いや、だから・・・・・・」

ハヤテ・ナギ・アテネ「あっ！ピサロナイトの色違い的な！？」

カンダタA・B・C「だから色違いじゃねぇっってんだろうが！！！」

先ほどまでの空気から一転、三人ハモってハヤテ達にツッコミを入れるカンダタ一味。

ハヤテ「それならそうと早く云ってくださいよ・・・紛らわしい」

カンダタ子分A「紛らわしいって、最初から色違いじゃないって云ってんだろうが・・・・・・」

アテネ「まぁ、あなた達が色違いだろうがカンダタの子分だろうと関係ありませんわ」

カンダタ子分B「だから色違いじゃないって・・・ん？つーかお前達俺達がカンダタの子分だって知ってるだろ！」

ナギ「私達はお前達が何者であろうと倒すのみ！・・・主にハヤテとアテネが！」

カンダタ子分Ｃ「ふんっ！上等だ！」

カンダタ子分Ａが現れた。
カンダタ子分Ｂが現れた。
カンダタ子分Ｃが現れた。

ハヤテ
ＨＰ５０
ＭＰ２０
勇　４

アテネ
ＨＰ２７
ＭＰ３９
魔戦　５

ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ６０
遊　７

ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！

カンダタ子分Ａに合計１５のダメージ！！

アテネはヒャドを唱えた！

カンダタ子分Ａに３２のダメージ！！

ナギはハヤテを応援した！

ハヤテのテンションが５上がった！

ハヤテ「何かサラッとお嬢様の新しい特技が出ましたね」

ナギ「いや、この先流石にパルプンテだけじゃキツイと思って・・・・・・」

アテネ「今さらですわね・・・」

カンダタ子分Ａの攻撃！

ハヤテに７のダメージ！！

カンダタ子分Ｃの攻撃！

アテネに１２のダメージ！！

カンダタ子分Ｂの攻撃！

ハヤテに８のダメージ！！

アテネはヒャドを唱えた！

カンダタ子分Ａに３３のダメージ！！

カンダタ子分Ａをやっつけた！

ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！　会心の一撃！

カンダタ子分Ｂに合計７０のダメージ！！

カンダタ子分Ｂをやっつけた！

ナギ「おぉ！一撃で倒すとは流石はハヤテ！」

カンダタ子分Ｃ「っく・・・こいつ等、予想以上に強い・・・・・・・

此処は一旦引く！」

カンダタ子分達は逃げ出した。

ナギ「あっ、おい待て！」

ハヤテ「いえ、このまま逃がしましょう」

ナギ「えっ？な、何で・・・・・・って、あっ」

アテネ「気が着きましたか？私達の目的はあくまでカンダタの討伐。

このまま逃げた奴らを追えば簡単に拠点が割れますわ」

ハヤテ「では、見失う前に付けていきましょうか」

弟七話「シャンパーニの塔・VSカンダタ」

ハヤテ「どうやら此処がカンダタの居場所のようですね・・・・・・」

逃げたカンダタの子分の後を付けて来たハヤテ達は、遂にカンダタの居場所と思われる大きな塔に辿り着いた。

アテネ「地図によると・・・多分、此処はシャンパーニ塔という所ですわね」

ナギ「アリアハンにいた時から思ってたけど・・・この世界の建築物はどれも中世風だよな？世界が違うと時代も違うものなのか？」

塔を見上げながら隣にいるハヤテに問いかけるナギ。

ハヤテ「いえ・・・そう聞かれましても、僕も異世界に来るのなんて初めてですから答えられませんよ・・・・・・」

アテネ「それより私は何処でも日本語が通じる方が不思議ですけどね」

こちらもナギと同じように塔を見上げながらつぶやくアテネ。

ハヤテ「いや・・・お二人とも、そんな気にするだけ無駄な疑問はいいですから早く中に入りましょうよ」

アテネ「そうですわね。何時までも見上げているだけでは始まりませんし・・・・・・」

ハヤテ「うん。じゃあ行こうか」

そう云って歩き出したハヤテ達だったのだが・・・・・・・・・・

ハヤテ「あの・・・・・お嬢様？その・・・疲れないんですか？ずっと上を向いていて・・・・・って云いますか行きますよ？」

依然、上を向いたままだったナギはハヤテの問いに、今度は下を向いて答えた

ナギ「・・・・・・わ、私も行かないと駄目か？」

ハヤテ「はい？」

ナギ「いや・・・だって私がいてもハヤテやアテネの役にたないどころか、むしろ足手纏いになっているし・・・・・何よりこの塔、高くて昇るの疲れそうだし・・・・・・」

ハヤテ「お嬢様・・・明らかに最後のが本音ですよね？」

ナギ「ギクッ！」

アテネ「まぁ、別に此処に残るのは構いませんけど・・・・・・貴女が一人でも魔物に対処できると云うのなら」

ナギ「うっ・・・・・・・・」

アテネ「私達が戻ってきた時に『返事がない。唯の屍のようだ』になっていない自信があるのなら好きにすると良いですわ」

ナギ「自身くらいあるに決まっている！・・・・・・・・・・・し、屍になる自信が・・・」

ハヤテ・アテネ「・・・・・・・・・・・・・・」

自信満々に「ある」と云ったが、間をおいて目を逸らしながら駄目な宣言をしたナギに呆れる二人。

ハヤテ「はぁ・・・では疲れた時は云ってください。僕がお嬢様を抱えて昇りますから」

ナギ「本当か！？」

ハヤテ「はい」

アテネ「本当にハヤテは甘いですわね・・・・・・」

ハヤテ「あははは・・・これぱかりはしょうがないよ」

ナギ「よし！じゃあ、もう疲れたぞハヤテ！」

ハヤテ・アテネ「・・・・・・・・・・・・・・・」

ナギ「な、何だよ・・・疲れた時に云えって云ったのはハヤテじゃないか！しょ、しょうがないだろ、だってロマリアからここまで一度も休まずに歩いたんだぞ！？私、頑張ったじゃん！？・・・・・だからそんな可哀そうな人を見るような視線を私に向けるなあぁぁぁぁ！」

シャンパーニの塔・４階。

ハヤテの攻撃！

ギズモＤに１７のダメージ！！

ギズモＤをやっつけた！

それぞれ４８の経験値を獲得！

ハヤテはレベル８に上がった！
最大ＨＰが３３ポイント上がった！
最大ＭＰが１２ポイント上がった！

アテネはレベル９に上がった！
最大ＨＰが２１ポイント上がった！
最大ＭＰが３９ポイント上がった！
アテネはギラを覚えた！
アテネはスクルトを覚えた！

ナギはレベル１２に上がった！
最大ＨＰが０ポイント上がった！
最大ＭＰ１００ポイント上がった！

アテネ「以上、シャンパーニの塔での戦果ですわ」

ハヤテ「すっ飛ばしたね・・・・・・」

アテネ「しょうがありませんわ。だって此処に来るまでの戦闘を全て書いてもつまらないでしょう？それに何より、そこまで書くのは面倒ですし」

ハヤテ「ま、まぁ、そうだと思うけど・・・・・・」

ナギ「って云うかハヤテ、やっぱりお前は凄いな・・・此処までずっと私の事抱えて戦ってたもんな」

ハヤテ「まぁ、お嬢様は軽いですし・・・・・・それよりもう大丈夫ですよね？」

ナギ「うむ。おかげで十分英気を養えたからな」

アテネ「では、改めて行きましょうか」

ハヤテ達は戦闘で止まった歩みを再び開始した。

5階。

ハヤテ「・・・・・・何やら話し声が聞こえますね？」

アテネ「こそこそする必要なんてありませんわ。早く行きますよ」

ハヤテ「えっ？あ、アーたん、ちょっと待ってよ」

話し声が聞こえてきたので耳を澄ませていたハヤテだったが、それを気にする事無く行ってしまったアテネに仕方がないのでついて行く。

5階は今までの階のような入り組んだ構造ではなく、一つの開けた部屋のなっており、テーブルやイスなどが置いてあった。

カンダタ子分C「げっ！？何でお前達が此処に！？まずいっ！御頭に知らせないと！」

そう云ってカンダタ子分Cはさらに上の階へと走って行った。

ナギ「まだ上があるのかよ・・・・・・」

アテネ「多分、次の階が最上階ですよ」

6階。

6階は5階と同じように開けた部屋だったが、こちらは左右に柱が並び、その奥に玉座の様に一つの椅子があるだけだった。

カンダタ子分C「お、御頭！こいつ等ですよ！俺達を虚仮にした奴らは！！」

カンダタ子分A「やっちゃってくださいよ御頭！」

カンダタ「ったく、情けねぇな・・・お前らそれでも俺の子分なのか？」

呆れた様な目で、しかしその中に確かに怒りの感情を込めた目をしながら、ゆっくりとカンダタと思われる人物は椅子から立ち上がりハヤテ達の方に歩いてきた。

カンダタ「さて・・・カザーブでは随分こいつ等が世話になったそうじゃないか？たっぷりお礼をしないとな・・・・・・ん？何だ？お前達こんな餓鬼と女に負けたのか？」

カンダタ子分B「見てくれは弱そうですが、こいつ等中々強いんですよ・・・・・・」

ハヤテ・ナギ・アテネ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

カンダタ「ふんっ、だが俺の姿を見て恐怖で声も出ない様だぞ？」

アテネ「いえ、別に恐怖している訳では・・・・・・・まぁ、ある意味では恐怖を感じますけれど・・・・・・」

カンダタ「はぁ？何だある意味って？」

ハヤテ「いやぁ・・・・・・曲がりなりにも王国から、それも王の冠を盗むほどの盗賊なのでどんな人物なのかと思ったら・・・・・・」

ナギ「まさか覆面マントにパンツだけ履いて斧持ってるとか・・・・・・どう見ても唯の変態だろ・・・」

現れたカンダタを見た3人は、何とも形容しがたい表情を浮かべながらそう云った。

カンダタ「誰が変態だ！俺は大盗賊のカンダタ様だ！」

アテネ「変態でないなら大盗賊と云うより、ごろつきの色違いにしか見えませんけどね」

カンダタ「色違いでもねぇ！！」

ナギ「じゃあ、さつじんきの色違いか？」

カンダタ「種類の問題じゃねぇよ！」

ハヤテ「でも名前的には殺人鬼の方が大盗賊より怖いですよね？」

カンダタ「えっ？いや・・・・・・」

アテネ「確かに・・・大盗賊に会ったとしても１００％殺されるわけではありませんしねぇ・・・それに比べて、殺人鬼になんて会ったらもう間違いなく殺されますわね」

カンダタ「いや、だから・・・・・・」

ナギ「でもそれならデスストーカーも怖くないか？」

ハヤテ「あぁ、死のストーカーですもんね・・・まぁ、取り敢えず大盗賊よりは怖いですね」

アテネ「ではカンダタさん、貴方の名前は殺人鬼かデスストーカーの２択ですが・・・・・・どうしますか？」

カンダタ「聞けよ！何だよ、「どうしますか？」って！？何時俺が改名したいなんて云ったよ！？つーかこいつ等、全然人の話聞かないな！？」

カンダタ子分Ｃ「大丈夫です。これでこの流れ２回目ですから」

カンダタ子分Ａ「俺達もさまようよろいの色違いだとか、散々云われましたから・・・・・・」

カンダタ子分Ｂ「そんな奴等の話なんて聞かないで、とっとと倒しちゃってくださいお頭！！」

カンダタ「そ、そうだな・・・よしっ！俺達を虚仮にした落し前、きっちり取ってもらうぞ！！」

斧を構えハヤテ達の方に襲い掛かってくるカンダタ。

ハヤテ「っと、おふざけは此処までのようですね」

アテネ「あぁ・・・やっぱりふざけたのですね・・・・・・」

ナギ「ハヤテもアテネも頑張れー」

向ってくるカンダタに対して、ハヤテとアテネも武器を構えた。

カンダタが現れた。

ハヤテ
ＨＰ８３
ＭＰ３２
勇　８

アテネ
ＨＰ４８
ＭＰ７８

魔戦　９
ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ１６０
遊　１２

カンダタの攻撃！

ハヤテに２０のダメージ！！

ハヤテ「うわ！やっぱり流石に大盗賊って云われているだけあって強い・・・！」

アテネ「ですが所詮は一人ですわ！怯まずに行きなさいハヤテ！」

ハヤテ「うん！」

ハヤテのはやぶさの如き2回攻撃！

カンダタに合計２０のダメージ！！

アテネはスクルトを唱えた！

ハヤテの守備力が２８上がった！

アテネの守備力が２２上がった！

しかし何も起こらなかった！

ナギ「うん・・・もう、ある程度は解ってた・・・・・・それに、どうせ守備力が上がってもＨＰが２じゃ意味ないしな・・・・・・」

ハヤテ「お気を確かにお嬢様！そっちは壁ですよ！！」

ナギ「やっぱり私にはパルプンテしかないんだ！！パルプンテパルプンテパルプンテーーっ！！！」

自棄になってパルプンテを連発するナギ。

アテネ「ちょっと！そんなに連続でその呪文を唱えたらどうなるか解らないじゃないですか！？」

カンダタ「な、何だ？何が起こるんだ？」

ナギはパルプンテを唱えた！

山のように大きな魔人が恐ろしい笑い声を上げながらやってきた！

ナギはパルプンテを唱えた！

山のように大きな魔人の体に力がみなぎってきた！

ナギはパルプンテを唱えた！

突然何処からか恐ろしい呻き声が聞こえてきた！

カンダタは戸惑ってしまった！

魔人の攻撃！

カンダタ「えっ！？ちょ、ちょっと待ってｋ！！！！！！！！」

会心の一撃！　カンダタに９９９９のダメージ！！

カンダタをやっつけた！

それぞれ８１０の経験値を獲得！

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・」

戦闘の終了に、暫し静まり返る一同。

カンダタ子分Ａ「って！御頭！？生きてますか！？」

カンダタ「ぅあ・・・な、何とか・・・・・・・・・」

ナギ「はっ！余りの衝撃に気を失っていた・・・・・・・・・」

アテネ「何と云いますか・・・・・・実際だとあり得ないコンボで
したわね・・・・・・」

ハヤテ「運の良さが９９９は伊達では無いようですね・・・・・・
で、どうしますかこの人達」

気を取り直して、カンダタ達の方を見るハヤテ。

カンダタ子分Ｂ「ひっ！ゆ、許してくれ！王の冠でも何でも、此処
にある宝なら好きにしていいからよ！」

ハヤテ「・・・・・・って云ってますけど？」

アテネ「王の冠を返してくれると云うのなら別に後は勝手にすれば良いですわ」

さして興味なさそうに云うアテネ。

ナギ「私も別に人殺しがしたい訳じゃないからな」

アテネに同意するようにナギも答える。

ハヤテ「だ、そうですよ？良かったですね。お二人が慈悲深く寛容で」

カンダタ子分Ａ「あ、ありがてぇ！あんた等の事は忘れないぜ！」

カンダタ子分Ｃ「さ、さぁ！御頭！俺達の肩に掴って下さい！」

カンダタ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうしてカンダタ一味は、カンダタを背負いながら逃げて行った。

ハヤテ「えぇと・・・あっ、これが金の冠ですね」

なんと！金の冠を見つけた！　ハヤテは金の冠を手に入れた！

アテネ「そのようですわね・・・此方の宝箱はゴールドが入ってましたし」

ゴールド入った袋を持ちながらアテネは云う。

ナギ「おぉ！こ、これは・・・・・・！」

ハヤテ「如何しましたお嬢様？」

ナギ「見てくれハヤテ！このどくばりって武器、私でも装備が出来る！！」

嬉しそうにハヤテに向かって云うナギ。

ハヤテ「本当ですか！ですがどうしてそれがどくばりだと解るんですか？」

ナギ「ん？あぁ、宝箱の中に取扱説明書が入ってたからな」

ハヤテ「取扱説明書って・・・・・・・・・」

アテネ「細かい事は気にしなことですわ。さぁ、こんな所に長居は無用ですから、取り敢えずカザーブの村に行きましょう」

ハヤテ「そうだね」

ナギ「♪」

こうしてハヤテ達もシャンパーニの塔を後にした。

第八話「カザーブの村・新しい仲間」（前書き）

前回、ヒナギクを出し忘れた結果がこれです・・・・・・・・
やっちゃったぜ☆

第八話「カザーブの村・新しい仲間」

ハヤテ「そう云えば・・・・・・結局、ヒナギクさんは何処に行ったのでしょうかね？」

カザーブの村が見えてきた頃、ハヤテは思い出したようにそう切り出した。

ナギ「・・・・・・あっ」

ハヤテ「「あっ」ってお嬢様・・・完全に忘れてましたね？」

ナギ「そ、それは・・・でもお前だって「そう云えば」って云ったって事は忘れてたんだろ？」

ハヤテ「ま、まぁ、いま思い出したんですけど・・・・・・」

二人の会話を聞きながらアテネは呆れたように溜息を吐く。

ナギ「何だよその呆れた様な視線は・・・じゃあ、アテネは覚えてたのか？」

アテネ「当たり前ですわ・・・まったくあなた達は・・・・・・確かにヒナギクの行方は気になりますけど、あの子の事です、間違いなく何所かで生きている筈ですわ。ですから旅を続けていればそのうち会えますよ」

ナギ「あぁ・・・確かにヒナギクなら一人でも魔王とか余裕で倒しそうだしな」

ハヤテ「お、お嬢様・・・それはいくらヒナギクさんでも・・・・・」

アテネ「ふふっ、もしかしたら魔王の城で最後に会うのはヒナギクかもしれないわね？」

ハヤテ「あ、アーたんまで・・・・・」

カザーブの村―――――――――――――――。

アテネ「どうやら既に火の気は消えているようですね」

再び訪れたカザーブの村は、半分近くの民家が焼けてしまっていたが、最初にハヤテ達が訪れた時よりも大分マシになっていた。

そんな中、村人の一人がハヤテ達を見つけて近づいてきた。

村人「ようこそ、ここはカザーブの村です。おや？・・・あっ！あなた様方はもしや、先刻カンダタの子分たちを追い払って下さった御方では！？」

ハヤテ「えっ？そ、そうですけど・・・・・如何しましたか？」

村人「やはりそうでしたか！ありがとうございます！この村では最近、カンダタ一味の悪行にほとほと困り果てていたんです・・・・・さぁ、宜しければ村長にお会いください！村長もお礼がしたいと仰っていますから！」

ハヤテ「・・・どうしますか？」

アテネとナギに確認を取るように云うハヤテ。

ナギ「良いんじゃないか？お礼が云いたいって云ってるのなら断る必要もないだろう」

アテネ「私も異存はありませんわ。では村長の所まで案内して頂けますか？」

村人「はい！」

村長の家。

村人「村長！カンダタ一味を追い払って下さった旅のお方が戻られました！」

村長「そうか！では早速お通ししなさい！」

村人「さぁ、中にお入りください」

村人に通され、部屋の中に入って行くハヤテ達。

ハヤテ・アテネ・ナギ「失礼します」

村長の部屋はあまり大きくなく、家具も長机の両サイドに長椅子があるだけの簡素な部屋だった。

村長「おお！正しく先刻、儂と孫娘をカンダタの子分から救って下さった御方！」

嬉しそうに云う村長は、先程ハヤテが助けた老人だった。

ハヤテ「貴方は・・・・・・この村の村長さんだったのですか」

村長「はい、本当にあの時は助かり申した・・・今、こうして儂が無事に生きていられるのも偏にあなた様方のおかげ・・・・・・さぁさぁ、取り敢えずその椅子にお座りくだされ！」

村長に進められ、村長と向かい合うように反対側に座る三人。

村長「では、改めて村を救って下すってありがとうございます」

立ち上がり、深々と頭を下げる村長。

アテネ「別にお礼を云われる事ではありませんわ。むしろあの状況で見過ごせる方がおかしいですもの」

ハヤテ「そうですよ。ですから座ってください村長」

村長「なんとお優しい御方達で・・・・・・あぁ！それであなた様方のお名前は何と仰るですか？」

ハヤテ「僕は綾崎ハヤテと云います」

アテネ「天王洲アテネですわ」

ナギ「三千院ナギだ」

村長「ハヤテ殿にアテネ殿、ナギ殿ですか。・・・・・・・・・・そ

う云えば聞きたかったのですが、あの後、すぐに何処かへ向かわれたようですが・・・一体どちらへ行ったのですか？」

ナギ「私達の目的はカンダタから盗まれた金の冠を取り戻す事だったからな。だから逃げた奴らを追ってあいつ等の隠れ家まで行ったんだよ」

村長「何と！！では金の冠は！？」

ハヤテ「これですよ」

袋から金の冠を取り出して村長に見せるハヤテ。

村長「おぉ・・・これは正しくロマリア王が盗まれた金の冠・・・・・・では、もしやカンダタ一味を討伐なすったのですか！？」

ハヤテ「えぇ、まぁ・・・・・・」

村長の勢いにたじろぐハヤテ。

村長「な、何と・・・・・・まさかカンダタ一味を討伐してしまうとは・・・・・・カンダタ一味の被害はこのカザーブの村だけではなくロマリアは勿論、ノアニールの村やアッサラームの村、果てはイシスの国やポルトガの国まで及んでいた程だと云うのに・・・・・・これを聞いたら大勢の人々が喜ぶであろう！」

ハヤテ「は、はぁ・・・そんなに凄い人だったんですかアレ・・・・・・」

ナギ「変態にしか見えなかったがな・・・・・・」

村長「何はともあれ、今日は是非この村にお泊りくだされ。村一同、精一杯御持て成し致しますので」

アテネ「では、お言葉に甘えましょうか」

ハヤテ「そうですね。もう直ぐ日も暮れてしまいますし」

ナギ「良かった・・・やっと休める・・・・・・」

「あ、あの・・・・・・」

話が纏まった所に、ハヤテ達の背後から女性の声が聞こえてきた。

村長「おぉ、ターニア！こちらが私達を助けてくれたハヤテ殿とアテネ殿とナギ殿だ。さぁ、お前も良くお礼を云いなさい」

ターニアと呼ばれた女性は、村長と一緒にハヤテが助けた村娘だった。

ターニア「は、はい！本当にありがとうございました！」

ハヤテ「いえいえ、それよりお怪我はありませんでしたか？」

ターニア「は、ハヤテ様のおかげでなんともございません／／／／／／／／／／／／／／」

ナギ（ん？こいつ顔が赤いけど・・・まさか・・・・・・）

アテネ（ハヤテ・・・貴方はまた厄介な病気を振りまいたのですか・

・・・・・・・・・）

村長「で、ターニア。宴の準備は整ったのか？」

ターニア「いえ、料理の方がもう少し・・・ですから先にお風呂の準備が整いましたので、お先にお勧めしようかと思い伺ったのですが・・・・・・」

村長「そうかそうか。では、如何ですかな皆様？」

再びハヤテ達の方に視線を戻し問いかける村長。

アテネ「それはありがたいですわね」

ナギ「ずっと歩いて疲れたしな・・・・・・」

ハヤテ「では、お願いします」

村長「ターニア。案内して差し上げなさい」

ターニア「はい」

カポーン

ハヤテが案内された風呂はあまり大きくはなかったが、そこそこ立派な露天風呂で、何より周りの景色のカザーブの村を囲む山々や既に沈みかけている夕日、その反対側に見え始めている星々を一望で

きるとても素晴らしいものだった。

ハヤテ（どうして・・・こうなった・・・・・・・・・）

だがそんな素晴らしい景色を見る事もなく、ハヤテは苦悶していた。

ターニア「？どうかしましたか？もしかしてお湯加減がまずかったですか？」

ハヤテ「い、いえ、丁度良いですよ・・・湯加減は・・・・・・」

ターニア「そうですか？それなら良いのですが・・・何かあれば直ぐに云ってくださいね？」

ハヤテ・ターニア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ（しいて云うなら、何で貴女が僕の隣で普通に湯に浸かっているんですか！？）

ハヤテが苦悶している理由、それは何故か隣にいるターニアだった。

ハヤテ・ターニア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

改めてターニアの方を見るハヤテ。幸い湯が白濁湯の為、裸を見る事はない。

ターニア「？」

ハヤテ（？じゃなくて・・・・・・・あぁもう、直接聞こう）

ハヤテ「あの・・・・・・・」

ターニア「はい？何ですか？」

ハヤテ「いえその・・・・・・何でターニアさんが僕の隣にいるのかなぁ・・・なんて思っているんですけど・・・・・・」

ターニア「え・・・・・・あぁぁ！そ、それはですね・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテの問いに、先程までとは打って変わって顔を真っ赤にしてうろたえるターニア。

ターニア「あの・・・その・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「その・・・・・・？」

ターニア「あうぅ・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「・・・・・・？」

暫く、しどろもどろしていたターニアだったが、やがて意を決した様に云い放った。

ターニア「は、ハヤテ様！わ、私を貰って頂けませんでしょうか！？」

ハヤテ「・・・・・・・・・はい？」

予想外のターニアの叫びに、意味を理解できずに間の抜けた返事を

するハヤテ。

ターニア「で、ですから！私をハヤテ様の・・・お、お嫁さんにして欲しいのです！」

再びのターニアの叫びを聞いて、漸くして意味を頭が理解したハヤテは一気にうろたえた。

ハヤテ「いやいやいやいや！その、と、突然過ぎますし、いきなり僕もそんなこと云われても混乱しますし、そもそもだからって僕の隣でお風呂に入っている意味が解りませんし！！」

ターニア「それはその・・・ハヤテ様には、私の全てを見ていただきたいと思いまして・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ザバッ

そう云って立ち上がるターニア。

ハヤテ「ちょ、ちょっと！ななななな何してるんですか！？た、タオルを巻いてください！！／／／／／／／／／／／／／／」

ターニア「こっちを向いてくださいハヤテ様・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ザバッ

ハヤテ「ぼ、僕は先に上がらさせてもらいます！！／／／／／／／／／／／／／／」

勢いよく立ちあがり脱衣所の方へ向かおうとするハヤテ。

ターニア「あっ！ま、待って下さい！って、きゃあ！！」

ハヤテ「えっ？うわっ！！」

ドサッ！

ハヤテ「痛てて・・・・・・大丈夫ですかターニアさん・・・っ！？」

ターニア「は、はい・・・すみません・・・ぁ／／／／／／／／／／／／／／」

お約束――――としては逆な気もするが、風呂を出ようとしたハヤテを引き留めようとしたターニアが足を滑らせ、それに気づいたハヤテが受けとめようとしたが、咄嗟の事で受け止めきれずそのまま倒れこみ、ターニアがハヤテを押し倒したような形になった。

ハヤテ「と、取り敢えず・・・退いて頂けると嬉しいなぁって思うんですけど・・・・・・正直目のやり場に困ります・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

顔を真っ赤にして横を向きながら云うハヤテ。

ターニア「・・・・・・・い、嫌です／／／／／／／／／／／／」

こちらも顔が真っ赤だが、ハヤテの顔を真っすぐに見ながら答えるターニア。

ハヤテ「嫌って・・・・・・色々とまずいですよこの状況は・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／」

ターニア「だって、私が退いたらハヤテ様は出て行ってしまうのでしょう？／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「あ、当り前じゃないですか／／／／／／／／／／／／／／／／」

ターニア「わ、私、まだハヤテ様の答えを貰っていませんもん！／／／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「こ、答えって・・・・・・・さっきののですか？／／／／／／／／／／／／／／」

ターニア「ひ、一目惚れだったんです！あの時は本当に怖くて・・・・・・もう死んでしまうかと、いえ、それ以上に辱められるかと思ったんです・・・・・・でも、そんな時に貴方が颯爽と駆け付けてくれて・・・あの状況で惚れるなと云う方が無理です！！／／／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「い、いえ、そう云われましても・・・・・・・・・・」

ターニア「駄目です！もう、我慢できません！／／／／／／／／／／／／／／」

そう云って、徐にハヤテの顔に自分の顔を近づけていくターニア。

ハヤテ「って、ちょ、ちょっと！／／／／／／／／／／／／／／／／」

後、数センチでくっ付く・・・・・・その時！

「だあああぁぁ！いい加減しないかお前達ーーーー！！！！！！！！」

ハヤテ・ターニア「えっ！？」

突如、そんな叫び声と共に敷居であった壁が破壊され、ハヤテ達は停止した。

「さっきから見ていれば、何なのだこの状況は！？」

「そうですわ！ハヤテと混浴している上に押し倒すなんて！なんて羨まs・・・いえ、なんて破廉恥な！！」

ハヤテ「お、お嬢様にアーたん！？」

敷居を破壊して乗り込んできた人物――――それは云わずもがな、アテネとナギだった。

ターニア「お、お二人とも！こ、此方は男湯ですよ！？」

ナギ「お前が云えた事じゃないだろう！」

アテネ「貴女がいる時点で、ハヤテ以外の男がいないのは解りきっていますわ」

ハヤテ「って！お嬢様もアーたんもタオル！タオルを巻いて下さい！見えてます！色々と云うか全部見えてます！」

アテネ「あら？私はハヤテになら幾らでも見られても気にしませんわ。むしろ見たければ何時でも見せますわよ？」

ナギ「私だってもうこれで３回目なんだ。もう今更恥ずかしがらないぞ！」

ハヤテ「そ、そう云う問題では・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／」

ターニア「大体何なんですか！後もう少しでハヤテ様とキスが出来たのに！」

アテネ「させて堪りますか！ハヤテの唇は私の物です！」

ナギ「何を！ハヤテは私の執事だ！ハヤテの全ては私のだ！」

三人「――――――――――――――――――――――――――！！！！！！」

ハヤテ（あぁ・・・何故か視界が肌色一色に・・・・・・しかもまな板の上に大きなメロンが４つも・・・・・・）

ナギ「誰がまな板だあぁぁぁぁ！！！」

ナギの攻撃！　会心の一撃！！

ハヤテ「グハッ！！」

ハヤテに２８１のダメージ！！

ハヤテは死んでしまった！

ハヤテ（あれ・・・・・・？）

神父『おおハヤテ！死んでしまうとは情けない・・・・・・。そなたにもう一度機会を与えよう。再びこのような事が無いようにな。では行け！ハヤテよ！』

ハヤテ「はっ！！」

ガバッ！

ハヤテが目を覚ますと、そこは先程までいた風呂場ではなく、ベッドの上にいた。

ハヤテ「ゆ、夢・・・？」

ハヤテ（そ、そうだよな・・・僕が女性に告白された上に襲われそうになるなんて・・・・・・って云うかあの神父は一体・・・・・・・・・？）

ターニア「あっ！目が覚めましたか？」

ハヤテ「はい！？」

いきなり声を掛けられ、驚くハヤテ。

ターニア「良かったぁ・・・ハヤテ様、気がついたら気を失っているんですもの、吃驚しちゃいましたよ」

ハヤテ「えっ？」

ハヤテ（気を失っていた・・・・・・・ってまさか・・・）

ハヤテ「あの・・・もしかて風呂での一件は夢じゃなくて現実・・・・・・？」

ターニア「なっ！私の告白を夢にする気ですか！？」

ハヤテ「い、いえ！すみません・・・あんな体験した事がなかったもので、信じられなくて・・・・・・」

ターニア「・・・・・・ふふっ、良いですよ。それにしても・・・ふふっ、あはは！」

突然笑い出すターニアに「？」を浮かべるハヤテ。

ハヤテ「な、何ですか、急に笑い出して・・・・・・？」

ターニア「あはっ、す、すみません。でも可笑しくて。ふふっ」

ハヤテ「？」

アテネ「あら？その様子だと本当に云ったみたいね？」

ターニアの答えに更に「？」を増やしているハヤテの元に、今度はアテネとナギがやってくる。

ターニア「は、はい。本当に云われちゃいましたよ」

ナギ「だから云っただろう？そいつは生粋の鈍感男だから直球で云ってもスルーしかねないって」

現れたアテネとナギと普通に話すターニア。

ハヤテ「な、何の話なんですか？」

ターニア「あ、あぁ・・・実はお二人にハヤテ様が起きたら、きっと告白された事を夢だと思っているだろうから気をつけろって云われてたんですよ。そうしたら、本当に夢だと疑っているようでしたから、何だか可笑しくて」

ハヤテ「お、お二人とも・・・・・・」

多少、恨めしそうな目線を二人に向けるハヤテ。

ナギ「良いじゃないか、本当だったし」

アテネ「恨むのなら自分の鈍感ぶりを恨むことですわ」

そう云って、笑い合う3人。

ハヤテ「はぁ・・・・・・って云いますか、皆さんは何時の間にそんなに仲良くなられたんですか？確か僕の記憶では物凄い云い合いをしていたような気がするのですが・・・」

アテネ「あぁ・・・まぁ、昨日の敵は今日の友と云いますか」

ナギ「同じハヤテが好きなのは気に食わんが、ハヤテを好きになっ

てしまう気持は痛いほど解るからな」

ターニア「と云う訳で、気がついたらこうなってました」

ハヤテ「そうでしたか・・・・・・・・」

ターニア「そ、それで告白の答えなんですけど・・・・・・」

ハヤテ「えっ！こ、答えですか・・・・・・？」

触れられたくない話を振られ、うろたえるハヤテ。

ターニア「いえ、その・・・答えはまだ良いんです」

ハヤテ「・・・・・・へ？」

予想外の返事に、間の抜けた返事をするハヤテ。

ターニア「お二人から聞きました・・・ハヤテ様は勇者様で、魔王を倒す旅をなさっているって・・・・・・そんな何時死んでしまってもおかしくない状況に身を置いている時に、お優しいハヤテ様が私の告白に答えてくれるなんてとても思えないんです」

ハヤテ「は、はぁ・・・・・・・・」

ターニア「ですから、アテネさんとナギさんと相談したのですけど、私も皆さんと一緒に付いていくことにしました！」

ハヤテ「・・・・・・って、えっ？」

これまた予想外の返事に間の抜けた返事を返すハヤテ。

ターニア「大丈夫です！私、確かに攻撃とかは無理かもしれませんけど、回復魔法とかアイテムの知識とかなら自信がありますから！」

目を煌めかせながら拳を握り熱弁するターニア。

ハヤテ「って、二人と相談したって、良いんですかお嬢様にアーたん？」

アテネ「良いんじゃないですか？この子が危険を承知で付いてきたいと云うのなら」

ナギ「好きな人と離れたくないと云う気持ちは解らんでも無いからな」

ハヤテ「そもそも、村長は良いって云ってるんですか？」

ターニア「お爺様は・・・・・・」

バタンッ！

村長「良くぞ云ったターニア！」

ハヤテ「そ、村長！？」

タイミングよく部屋に入って来た村長。

村長「お前はもう立派な大人じゃ！さすれば、この村の仕来り『惚れた異性は死の果てまで追いかけて捕まえよ』に従って、ハヤテ殿

を射止めるのじゃ！」

ターニア「はい！ありがとうございますお爺様！」

ハヤテ（何ですか、そのストーカーを生み出しそうな仕来たりは・・・・・・・・・）

ターニア「では、よろしいですよねハヤテ様！」

ハヤテ「はぁ・・・・・・解りました。何とかターニアさんも守りきって見せますよ」

ターニア「はぅ・・・やっぱり格好いいです！！」

ガバッ

ハヤテ「ちょっと、ターニアさん！？」

ハヤテに思いっきり抱き着くターニア。

ナギ「あっ、何をしてるんだお前は！」

アテネ「そうですわ！確かに旅の同行は許しましたがハヤテを譲るなんて一言も云ってませんわよ！！」

続くようにハヤテに雪崩れ込むナギとアテネ。

ハヤテ「お、お嬢様にアーたん落ち着いて！」

村長「うむうむ、若いとはやはり良いのう」

５分後。

村長「で、落ち着きましたかな？」

ハヤテ「えぇ・・・まぁ・・・・・・って云うかまだいたんですね」

村長「いやいや、ハヤテ殿は中々激しいのがお好きなようで」

ハヤテ「字面でしか表現できないんですから、誤解を招くような事云わないでください！」

ナギ・アテネ・ターニア「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ハヤテ「そこも無駄に顔を赤らめないでください！」

村長「まぁ、冗談はさて置いて・・・・・・ハヤテ殿、貴方を勇者様と見込んで折り入って相談があるのですが・・・」

表情を真剣なものに切り替えて、ハヤテに向き直り云う村長。

ハヤテ「相談・・・ですか？」

ターニア「何かあったのですかお爺様？」

村長「うむ、お前は知っているであろう？最近、ノアニールの村との連絡が取れなくなっている事を・・・・・」

ターニア「は、はい、知ってはおりますが・・・・・・？」

村長「気になってはおったのだが、如何せんカンダタ一味の事や日に日に力を増しているモンスターに手を焼いておって、調査に行けなくてな・・・・・・」

ナギ「で、それがどう関係しているのだ？」

村長「はい・・・そんな時に貴方様方がカンダタを討伐してくださったので、やっとの事で何人かの村の男達をノアニールに向かわせたのですが・・・・・・今し方戻って来たところで、おかしな事を云っているのです」

ハヤテ「おかしな事？」

村長「えぇ・・・その者達が云うには・・・・・・ノアニールの村人が全員、眠っていると」

４人「・・・・・・眠っている？」

村長の言葉に一様に頭に「？」を浮かべる４人。

村長「それもただ眠っているのではなく、何かしらの呪文や呪いで意図的に眠らされているようだったと」

アテネ「意図的に？・・・良く解りませんわね。もっと詳しい事は？」

村長「解りませぬ・・・その者達も、村の状況を見て気味が悪くなって早々に逃げ帰って来た様なので・・・・・・」

ハヤテ「では、僕達にその謎を調べて欲しい・・・と云う訳ですか？」

村長「流石はハヤテ殿。理解が早くて助かります。ノアニールの村とは古くからの盟友、あの村に何か大事があればそれ即ち我が村の事と同義・・・・・今すぐにでも調査隊を派遣したいのですが、この村には派遣できる程の武勇を持った者はおりませぬ・・・・・・ですが、カンダタを討伐なさったハヤテ殿ならば何とかしてくださるのでは、と思い相談に来たのですが・・・・・」

ハヤテ「・・・・・・どうしますか？」

村長の言葉を聞き終え、後ろを振り向きナギとアテネとターニアに尋ねるハヤテ。

ターニア「聞き届けて頂けませんでしょうか？私もノアニールの事が気になります！」

アテネ「まぁ、良いんじゃないですか？どうせ私達には行くあてが無いんですし・・・それに村を丸ごと眠らせてしまうほどの魔力の持ち主がいるのでしょう？もしかすれば、魔王に関する情報が手に入るかもしれないじゃないですか」

ハヤテ「た、確かに・・・・・・それで、お嬢様は？」

ナギ「ん？私はハヤテに付いて行くだけだ。ハヤテが行くと云うのなら行くぞ」

ハヤテ「そ、そうですか・・・・・・では、解りました村長。お引

受けいたしますよ」

再び村長の方に向き直りそう云うハヤテ。

村長「おぉ！引き受けてくださいますか！良かった良かった！ハヤテ殿が調べてくれると云うのならば解決したも同然だ！さぁ！食事の準備が整っておりますゆえ、今日は存分にお寛ぎ下され！」

こうしてハヤテ達の長かった一日の夜は更けていった。

翌朝、早朝。

村長「もう行ってしまわれるのですか？」

ハヤテ「えぇ、ノアニールに行く前にロマリア王に金の冠を返しに行かねばなりませんので」

村長「そうでしたな・・・おぉ！そうでした。餞別と云ってはなんですが、あれを貰ってくだされ」

ハヤテ「あれ？」

村長の指さした方を見るとそこには――――――――。

ナギ「おーい！ハヤテー！」

ターニア「こっちですよー！」

アテネ「早くしないと置いて行っちゃいますわよー！」

天空シリーズでお馴染みの馬車に乗った三人がいた。

ハヤテ「あ、あんなに立派な馬車を頂いてもいいのですか？」

村長「勿論ですとも。ただその代りに、必ずノアニールを、いや、魔王を打倒し世界を平和に導いて下され」

ハヤテ「はい！必ずやって見せますよ！」

村長「後、孫娘の事も頼みましたぞ？」

ターニア「ハヤテ様ー！」

ハヤテ「あはははは・・・頑張ります」

ハヤテ「では、行きましょうか！」

馬の手綱を握りながらハヤテが云う。

ナギ「おぉ！」　アテネ「えぇ！」　ターニア「はい！」

のぞき窓を開け、ハヤテに向かって返事をする三人。

こうしてハヤテ達は再びロマリアへ、そしてノアニールへの

第八話「カザーブの村・新しい仲間」（後書き）

ターニアの事、ドラクエを知っている人なら解りますよね？
解らない人はハヤテみたいな水色の髪色でセミロングの可愛い女の子だと思って下さい。
すみません。表現力が低いもので・・・・・・

第九話「眠れる村のノアニール」（前書き）

出すつもりはなかったのですけど、また天空シリーズのキャラを出してしまいました。

第九話「眠れる村のノアニール」

無事、ロマリア王に金の冠を返したハヤテ達は、一路ノアニールの村へと馬車を進めていた。

ハヤテ「この道で合っていますか？ターニアさん」

ターニア「はい、もう少ししたら森が見えてきますので、そこから右に曲がれば直ぐにノアニールの村が見えてくるはずです」

アテネ「・・・何だか、貴女がいればこの地図も必要なさそうですね」

ターニア「そんなことありませんよ。私が知っているのなんて精々、ノアニールやロマリアまでの道だけです・・・一応、ポルトガやアッサラームへの行き方も知識としてはありますけど、それでもそこまでですから・・・・・・」

ハヤテ「それでも十分助かりますよ。ターニアさんのおかげで、暫くはスムーズに進めそうですよ」

ターニア「そ、そんな、私なんて・・・・・・／／／／／／／／／／／／」

ハヤテの言葉に顔を赤く染めるターニア。

アテネ・ナギ「・・・・・・・・・・・・」

そんな状況を何とも云えぬ表情で見つめるナギとアテネ。

ナギ『如何するんだよアテネ！？何か無駄に良い雰囲気だぞあの二人！これじゃあ私達の立つ瀬が・・・・・・・』

アテネ『そんなこと云いましても・・・・・・道案内ばかりはどうしようもありませんわ。私だって如何にかしたいですけど・・・此処は我慢ですわナギさん』

ナギ『むぅ・・・・・・・・・』

キラービーが現れた。
どくいもむしが現れた。
マタンゴが現れた。

アテネ「これよ！」

ナギ「これよって・・・一人だけずるいぞ！戦闘じゃどう考えても私は役に立たないじゃないか！」

アテネ「あら？私は一度もハヤテの事で共闘するなんて云ってませんわよ？」

ナギ「ぐぬぬぬ・・・・・・私だって武器を持ったんだからな！」

ハヤテ「えぇと・・・話が終わったのなら早く外に出て戦闘に参加して欲しいのですけど・・・・・・」

アテネ「今行きますわ♪」

ハヤテ

ＨＰ１０２
ＭＰ　３２
勇　　９

アテネ
ＨＰ５１
ＭＰ８５
魔戦１０

ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ１８０
遊　１３

ターニア
ＨＰ３２
ＭＰ６７
僧　８

ナギ「あれ？いつの間にかレベルが上がってないか？」

ハヤテ「あぁ・・・カンダタを倒したときに、書くタイミングが解らなくてそのまま忘れてたんですよ」

アテネ「って云いますか・・・何です、あの気持ちの悪い二匹の虫と、きのこみたいなのは・・・・・・？」

ターニア「確かに見た目はアレですけど、厄介なモンスターですよ・・・例えばキラービーなんかは・・・」

キラービーの攻撃！

ハヤテに3のダメージ！！

ハヤテは痺れて動けなくなった！

ターニア「・・・このように偶に痺れて動けなくなる事があります」

ハヤテ「も、もう少し・・・早く、云って・・・・・・欲しかった、です・・・・・・」

ターニア「す、すみませんハヤテさま・・・え、えっと、後、どくいもむしはですね！」

どくいもむしは猛毒の息を吐き出した。

ハヤテは猛毒におかされた！

ターニア「毒の息を吐きますので・・・・・・ごめんなさい」

ハヤテ「い・・・え・・・・・・」

マタンゴの攻撃！

ハヤテは4のダメージ！！

ハヤテは眠ってしまった！

ターニア「マタンゴは・・・・・・もう説明する必要なさそうですね・・・・・・」

ハヤテ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アテネ「説明の遅い貴女も貴女ですけど・・・全ての効果にかかるハヤテもハヤテですわね・・・・・・」

ナギ「つーか、どうすんだよ！？ハヤテ無しでこのパーティ何とかなるのかよ！？」

ターニア「は、ハヤテ様の事は私が何とかしますので、お二人が時間を稼いでください！」

アテネ「何とかできますの？」

ターニア「大丈夫です！私、回復魔法だけは得意ですから！」

アテネ「・・・・・・頼みましたわよ」

アテネはヒャドを唱えた！

マタンゴに４０のダメージ！！

マタンゴをやっつけた！

ナギの攻撃！

急所に当たった！　どくいもむしの息の根を止めた！！

ナギ「おぉ！何か凄いこの武器！！」

ターニアはキアリーを唱えた！

ハヤテの体に回っている毒が消えた！

ターニアはキアリクを唱えた！

ハヤテの痺れが消えた！

ターニアはザメハを唱えた！

ハヤテは目を覚ました！

ハヤテ「はっ！僕は一体何を・・・・・・？」

ターニア「すみませんハヤテ様・・・私の説明が遅いばかりに・・・・・・」

ハヤテ「えっ？・・・あぁ、そうでしたね。大丈夫ですよ、引っ掛かった僕も悪いですし・・・・・・」

ターニア「ハヤテ様・・・・・・／／／／／／／／」

アテネ「でも、よく1ターンに3回も動けましたわね？」

ターニア「それは勿論、愛の成せる業です！」

アテネ・ナギ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ「えっと・・・と、取り敢えず」

ハヤテの攻撃！

キラービーに４７のダメージ！！

キラービーをやっつけた！

それぞれ３５の経験値を獲得！

５４ゴールドを手に入れた！

ハヤテ「えっと・・・皆さん？」

あれから何故かにらみ合うようにしていた3人に声を掛けるハヤテ。

ナギ・アテネ「ハヤテ！！」

ハヤテ「はい！？」

ナギ・アテネ「云っておくが（おきますが）、私もあいつ（彼女）に負けないくらいハヤテを愛していますからね！！」

同時にハヤテに詰め寄りながら叫ぶナギとアテネ。

ハヤテ「えぇ！？は、はぁ・・・ありがとうございます／／／／／／／／／／」

ターニア「でも、やっぱりお二人もハヤテ様に劣らず凄い御方ですね。ハヤテ様がいなくても敵を殆ど倒しちゃいましたし」

ナギ「ん？おぉ、そうだろう！なんて云っても私はハヤテの主だか

らな！これくらいなんともないぞ！」

アテネ「まぁ・・・でも、今回は貴女がいて助かりましたわね。貴女がいたからこそ敵に専念できましたから。正直、ハヤテとナギさんを庇いながら戦うと云うのは結構骨が折れたでしょうし・・・」

ターニア「本当ですか！？そう云っていただけると嬉しいです！こんな私でもお役に立てたのなら！」

ハヤテ「では、そろそろ行きましょう」

ノアニールの村――――――

アテネ「えぇ、人です。しかもこんな道端で寝ていますわ」

村人「ぐうぐう・・・・・・」

ナギ「おい、何かあっちにもいっぱい寝てる人間がいるけど・・・・・・」

気味が悪くなってきたのか、ハヤテの上着の裾を掴みつつナギが云う。

ターニア「どうやらお爺様が聞いた事は本当みたいですね・・・・・・」

アテネ「しかし、本当だと解った所で如何しましょうかね・・・・・・誰か起きている人でもいれば事情を聴けるかもしれないのに・・・・・」

「も、もし！旅の御方ですか！？」

打つ手が無いと思った矢先、ハヤテ達はそう、緑の髪色をした青年に声を掛けられた。

ハヤテ「は、はい、そうですけど・・・如何しました？」

「おぉ！これぞ正に神の助けだ！私はヘンリーと云うものです。旅の御方、何卒私に力をお貸ししていただけないでしょうか！？」

切羽詰まったようにハヤテに詰め寄りながら、早口で云うヘンリーと名乗った青年。

ハヤテ「ち、力ですか・・・？」

アテネ「内容によりますわね。私達は今、この村の異変を調べているのです。貴方の頼みがこの異変に関係あると云うのなら、力を貸すのも吝かではありませんが？」

ヘンリー「本当ですか！？でしたら尚の事、私に力をお貸しください！」

ナギ「尚の事って、お前は何か知っているのか？」

ヘンリー「はい・・・・・実は村がこんな事になってしまったのは、他でもない私のせいなのです・・・・・・」

ターニア「私のせいって・・・まさか貴方が犯人なんですか？」

ヘンリー「ち、違いますよ・・・・・私が呪いをかけたのではなく、呪いをかけたのはエルフの女王様です」

ハヤテ・ナギ・アテネ「エルフの女王？」

聞きなれない単語に、ターニア以外が？を浮かべながら訝しげに聞き返す。

ターニア「確かにノアニールにはエルフの伝承がありましたけど・・・まさかエルフが本当にいたと云うのですか？」

ヘンリー「その通りです。この村がこんな状況になってしまったのも、私がエルフであるアンと駆け落ちをしてしまったからなのですから・・・・・・」

ハヤテ「エルフと駆け落ちって・・・随分と思いきったことをしましたね？」

ヘンリー「ですが、そのせいで関係のない村の人々がこんな目に・・・・・」

唇を噛みながら悔しそうに呟くヘンリー。

アテネ「そう云う事なら力を貸さなさない事もありませんわ。で、何をして欲しいのですか？」

ヘンリー「信じてくださるのですか！？」

ナギ「まぁ、信じがたい話だが・・・他に手がかりも無いし、何よりお前は嘘を吐いている様には見えんしな」

ターニア「そう云う事ですね」

ヘンリー「ありがとうございます！そうと決まれば急いでください！実は村がこんな状況になったと聞いて、私とアンは女王様に謝りに来たのです・・・ですがエルフの里までの道中で、突如現れたモンスターにアンが攫われてしまって・・・アンを助けるのに力を貸して欲しいのです！！」

ハヤテ「そうでしたか・・・それでアンさんの居場所は解っているんですか？」

ヘンリー「はい、私ではモンスターに歯が立ちませんでしたが、せめてもと思い、何とか居場所まではつけて行ったので解ります」

ハヤテ「でしたら早く馬車に戻りましょう。アンさんを一刻も早く助ける為にも！」

ハヤテ達はヘンリーを加え、馬車の方へ駆けて行った。

第九話「眠れる村のノアニール」（後書き）

ヘンリーです。知っていますかね？
と云いますか、アンの恋人の名前ってありましたっけ？
無かったような気がしたのでヘンリーを出したのですけど・・・・・・

第十話「地底の湖」

ヘンリーの案内のもと馬車をとばしたハヤテ達は、森の中にある洞窟に辿り着いた。

ハヤテ「ここで間違いありませんか？」

ヘンリー「はい、確かにこの洞窟の中に入って行きました」

アテネ「洞窟ですか・・・まぁ、最下層までの道のりは、シャンパーニの塔の時と同じように結果だけ書いて話を進めしょう」

ターニア「結果だけ書くって・・・何を云ってるんですかアテネさんは？」

ナギ「解らないなら知らなくて良いと思うぞ」

ターニア「？」

ハヤテ「と、取り敢えず！そんな事はいいですから、急ぎましょう！」

ハヤテ達は薄暗い洞窟の中へと入って行った。

地底の湖・地下４階。

ナギの攻撃！

急所に当たった！　バンパイアＤの息の根を止めた！！

それぞれ６１の経験値を獲得！

ハヤテはレベル１１に上がった！
最大ＨＰが９ポイント上がった！
最大ＭＰが１２ポイント上がった！
ハヤテはデインを覚えた！

アテネは１２レベルに上がった！
最大ＨＰが５ポイント上がった！
最大ＭＰが１３ポイント上がった！
アテネはイオを覚えた！
アテネはベギラマを覚えた！

ナギはレベル１５に上がった！
最大ＨＰが０ポイント上がった！
最大ＭＰ４０ポイント上がった！

ターニアはレベル１０に上がった！
最大ＨＰが６ポイント上がった！
最大ＭＰが１９ポイント上がった！
ターニアはバギを覚えた！

ナギ「以上が戦果だが・・・相変わらず私の能力アップが酷い事以外に何か質問あるか？」

ターニア「何で態々纏めて説明してるんですか？さっきまで普通にレベルアップしてじゃないですか？」

ハヤテ「気にしなくていいですよターニアさん。後、そろそろ諦め

て下さいお嬢様」

ナギ「うぅ・・・MPが上がっても新しい呪文を覚えなきゃ意味がないじゃないか・・・・・・」

アテネ「さて、ここが最下層の様ですけど・・・何処にいますかね？アンさんとアンさんを攫ったモンスターは」

ヘンリー「アン！何処にいるんだ！？いたら返事をしてくれ！！」

ヘンリーがそう叫ぶ。そうすると、洞窟の奥の暗闇の中から女性の声が聞こえてきた。

「そ、その声は、もしやヘンリー様ですか！？」

ヘンリー「おぉ、アン！無事なのか！？今すぐ助けに行くからな！！」

駆け出すヘンリー。だが・・・・・・！

ハヤテ「ヘンリーさん！危ないです！」

？？？？はメラミを唱えた！

ハヤテに２０のダメージ！！　ハヤテはヘンリーを庇っている！

ヘンリー「は、ハヤテさん！？大丈夫ですか！？」

ハヤテ「えぇ、これ位何ともありませんよ・・・」

「ほう？この俺のメラミを受けても平気とは・・・此処まで来たのは運などでは無いようだな」

そう、アンとは別の声が聞こえてきた。

アテネ「貴方がアンさんを攫った犯人ですね？」

「アン？あぁ、このエルフの事か・・・如何にもそうだが、それがどうかしたか？」

ヘンリー「アンを返せ！アンは私の大切な人なんだ！！」

「それは無理な相談だな・・・このエルフはバラモス様への大切な貢物。そう易々と渡すわけにはいかぬ」

ヘンリー「なっ、何だって！？」

アテネ「バラモス・・・確か、魔王の名前でしたわね。まさかこうも都合よく魔王の情報を持った者に会えるなって思ってみませんでしたわ」

ターニア「と云いますか、そろそろ姿を現したらどうですか？」

「そうだな。お互いに何時までも姿が見えないと云うのは不便だしな」

ボゥ・・・・・・

その言葉が終わったと同時に、洞窟の壁に掛っていた蝋燭に一斉に火が灯り、フロア全体を照らしだした。

「よくぞ此処まで来たな人間達よ。我が名は魔王の影。バラモス様の悪意が具現化した、バラモス様の影だ」

灯が灯り、見えてきたのは人型で、顔はドラゴンのような形をしていて、名前の通り影の様に真黒なモンスターだった。

その後ろにはアンと思われる赤みがかった髪色をした女性が鉄格子の中にいた。

ナギ「影って事は、本物のバラモスもこんな形してるのか・・・」

魔王の影「ふむ、見れば中々の上玉が三人も・・・男二人に用は無いが、お前達も一緒にバラモス様に差し上げれば俺の出世も夢ではないな・・・ふはははは！！」

アテネ「ふんっ、そんなのは真っ平御免ですわね」

ターニア「そうです！私達は皆ハヤテさま一筋なんですから！」

ナギ「いや、確かにそうだけど・・・もう少し状況を考えろよ・・・・・」

ハヤテ「あはははは・・・・・・取り敢えず、ヘンリーさんは危険ですから下がっていてください。必ず奴を倒してアンさんを助けますから！」

ヘンリー「はい！お願いします！」

魔王の影「私を倒すと云うのか？面白い！此処に来た事を後悔させ

てやる！！」

魔王の影が現れた。

ハヤテ
ＨＰ８４
ＭＰ４４
勇　１１

アテネ
ＨＰ５６
ＭＰ９８
魔戦１２

ナギ
ＨＰ　２
ＭＰ２２０
遊　１５

ターニア
ＨＰ３８
ＭＰ８６
僧　１０

ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！

魔王の影に２２のダメージ！！

アテネはメラを唱えた！

魔王の影に１５のダメージ！！
魔王の影「ふむ、中々やるようだが・・・これならどうだ？」
魔王の影はイオラを唱えた！
ハヤテに３１のダメージ！！
アテネに３４のダメージ！！
ターニアに３２のダメージ！！
ハヤテ「全体魔法・・・！拙いです！これをくらったらお嬢様が！！」
ナギ「えぇ！？」
ナギはしゃがんで防御の態勢をとった。
ターニア「大丈夫です！ナギさんの事なら任せてください！」
ターニアはマホカンタを唱えた！
ナギの前に輝く光の壁を作り出した。
光の壁が呪文を跳ね返した。
魔王の影に３７のダメージ！！
ナギ「あれ？生きてる・・・・・？」

ハヤテ「良かった・・・ありがとうございますターニアさん！」

ターニア「いえいえ、ハヤテ様のお役に立てるのならこれ位！」

ナギ「ハヤテ！」

ハヤテ「わわっ、お、お嬢様・・・」

しゃがんだ態勢から立ち上がり、ハヤテに抱きつくナギ。

ターニア「あっ！ナギさんだけずるいですよ！私もハヤテ様に抱きつきます！！」

ナギに続くように抱きつく・・・と云うか飛びつくターニア。

ハヤテ「ちょ、お二人とも！！」

アテネ「はぁ・・・・・あなた達は本当に呑気ですわね・・・今は戦闘中なのですよ？」

ハヤテ「アーたん・・・・・そう云いながら抱きついてるアーたんが云っても説得力の欠片もないよ・・・・・」

アテネ「／／／／／／／／／／／／／／」

魔王の影「何だあれ？あれがハーレムって奴か？」

ヘンリー「私にはアンがいますけど、流石にあれは羨ましいですね

え」

完全に蚊帳の外になった魔王の影の呟きに、いつの間にか隣にいたヘンリーが答える。

魔王の影「ふんっ、相手がいるだけマシじゃないか」

ヘンリー「ですかねぇ・・・魔王の影さんは誰か良い相手はいないんですか？」

魔王の影「俺か？一応、ウィッチレディとか吹雪の魔女とかにアタックしてんだけどなぁ・・・これが全然相手にされなくて・・・・・・やっぱ見た目だよなぁ」

ヘンリー「まぁ、確かに魔王の影さんの見た目はアレですよね」

魔王の影「だよなぁ・・・俺、周りからトカゲとか、酷い時にはカバとか云われるんだぜ・・・・・はぁ、どうせならやまたのおろち様とかダースドラゴン様みたいになりたかった・・・・・」

ヘンリー「あー・・・元気出してください」

アン「何であなた達は普通に会話しているのですか！？」

魔王の影「おっと、そうだったな・・・おい、お前達！何時までいちゃいちゃしているつもりだ！」

ハヤテ「ほら、敵にまで云われちゃいましたよ・・・皆さんそろそろ離れてください・・・・・」

ナギ「むぅ・・・まだハヤテ分が補給しきれてないんだが、仕方ないか」

ハヤテ「何ですかその何処かの軽音部員みたいな例え方は・・・・・・？」

ターニア「後で補給させてもらいますよ！」

アテネ「まぁ、補給するに越したことはありませんわね」

ハヤテ「お二人まで・・・・・・」

魔王の影「準備はいいか？」

ハヤテ「あぁ、すみませんねお待たせして・・・」

改めて魔王の影が現れた。

ハヤテ
ＨＰ１１１
ＭＰ　４４
勇　　１１

アテネ
ＨＰ５６
ＭＰ４６
魔戦１２

ナギ
ＨＰ　　２

ＭＰ２２０
遊　１５

ターニア
ＨＰ３８
ＭＰ２８
僧　１０

魔王の影「・・・・・・って、あれ？何かお前達、ＨＰ回復してないか？それにＭＰは逆に減っているような・・・・・・」

アテネ「あら？貴方は私達が、何もしないでただ抱き合っていたとでも思っていたのかしら？」

魔王の影「何っ！？」

ハヤテ「ヘンリーさんには時間稼ぎをしてもらいました」

ヘンリー「私でも皆さんのお役に立てたのなら何よりです！」

魔王の影「貴様・・・謀ったのか！」

ナギ「いや、あんなのに引っ掛かる方も如何かと思うがな・・・・・・」

呆れたように云うナギ。

アテネ「まぁ、そんな訳で、貴方がヘンリーさんと話して気がそれている間に、私がスクルトで守備力を２５５まで上げ・・・・・・」

ターニア「私がホイミでＨＰを回復し全員にマホカンタをかけ・・・・・・」

ナギ「私が応援でハヤテのテンションをスーパーハイテンションにして・・・・・・」

ハヤテ「僕はこうしてデインを凝縮してました☆」

笑顔で云うハヤテの手には巨大な青白い電撃の塊が。

魔王の影「えっ、ちょ、不味いってそれ！そんなのくらったら俺死んじゃうから！！」

ハヤテ「心おきなく逝ってください♪」

ハヤテはデイン・・・改めライデインを唱えた！

魔王の影「確かにこの場合の「いく」は逝くで合ってるんだろうけどな！！あぁ、もう仕方ないリレミト！！」

魔王の影はリレミトを唱えた！

魔王の影は戦闘から離脱した。

ドッカーン！！！

行き場を失ったライデインが地面にぶつかり、砂煙を巻き上げる。

ナギ「ゲホッゲホッ・・・やったのか？」

ハヤテ「いえ・・・どうやら呪文が当たる直前に逃げたみたいですね」

アテネ「逃げられましたか・・・・・・出来れば魔王の情報を聞き出したかったのですけど・・・」

ターニア「でも凄いですね！ハヤテ様の魔法でほら！！」

ターニアの指さす先には、砂煙が晴れ見えてきた巨大なクレーターの様な穴が。

ターニア「流石は勇者様ですね！ますます惚れちゃいましたよ！」

ハヤテ「あはははは・・・さ、さぁ、ヘンリーさん、多分この鍵で扉は開くと思うので、早くアンさん助けてあげてください」

ハヤテは盗賊の鍵をヘンリーに渡した。

ヘンリー「あっ、は、はい！」

鉄格子の方へと駈けて行くヘンリー。

カチャカチャ・・・ガチャン！

ヘンリー「アン！！」

アン「ヘンリー様！！」

鉄格子の扉が開いた途端、抱き合う二人。アンの方は涙ぐんでいる。

アン「あぁ、ヘンリー様！きっと助けに来てくれると信じていましたわ！！」

ヘンリー「勿論だとも！私はアンを失っては生きてはいけないのだから！」

抱き合ったまま、キスまでし始める二人。

ナギ「おぉ、お熱いなぁ」

アテネ「まぁ、良いじゃないですか？二人にとって感動の再会でしょうし」

ターニア「よし！ではハヤテ様！私達もあの二人に負けないようにキスをしましょう！」

ハヤテ「えぇ！？」

ナギ「おい！何がよしだ！？」

アテネ「そうです！何も態々貴女がする必要はありませんわ！ここが私が！」

ナギ「いやいや、ここは私が適任だろ！」

ターニア「何なんですか！私が最初に云ったんですよ！後から横槍を入れないでください！」

3人「――――――――――――――――――――――――」

ハヤテ「皆さん・・・もう少し空気を読んでください・・・・・・」

アン「あの・・・云い争っている様ですけど大丈夫ですか？」

ナギ達が騒ぎ出したので、周りに人がいる事を思い出したのか抱き合うのを止めた2人は、心配そうにハヤテの方に歩み寄ってきていた。

ハヤテ「えぇ、気にしないでください・・・終われば元に戻ってますから」

アン「そうなのですか？で、では・・・あの、ありがとうございました！あなた方のおかげで、私もヘンリー様も無事にまたこうして会えました！」

ヘンリー「本当にありがとうございました！」

ハヤテ「いえいえ、それよりも、これからお二人はエルフの里に行くのですよね？宜しければ、まだあの魔王の影が何処にいるか解りませんし、里までお送りいたしますが・・・どうしますか？」

ヘンリー「本当ですか！？あっ、いやしかし・・・どうするアン？」

嬉しそうに返事をした後、直ぐに何かを思い出したようにアンに確認をとるヘンリー。

アン「心配いりませんヘンリー様。この方達になら里への道を教えても問題ないと思いますわ」

ヘンリー「あぁ、そうだよな！ではお願いしても宜しいですか！」

ハヤテ「えぇ、お願いされなくても、ノアニールの事もありますし此方からお願いしたくらいですから勿論引き受けますよ。では、早くこの洞窟を出ましょうか。皆さん！行きますよ！」

ナギ・アテネ・ターニア「おぉ（えぇ）（はい）！！」

アン「本当に何事も無かったかの様になっている・・・・・・」

無事、アンを助け出したハヤテ達は、エルフの里へ向かう事となった。

「・・・・・・・・・・・・・・」

第十一話「エルフの里」（前書き）

都合のいい話かもしれませんが、これが私の精一杯です・・・・・・

第十一話「エルフの里」

エルフの里――

エルフの里は、先程までいた地底の湖よりも更に森の奥、日の光すら届かないほど欝蒼と木々の茂った所に存在していた。

ターニア「うわっ！眩しいです！」

里に入った途端、急に明るくなった為驚くターニア。

ハヤテ「大丈夫ですか？・・・・・・・おぉ、取り敢えずは、何事もなく着いたようですね」

ナギ「まぁ、何事もないと私達の存在が危ぶまれるがな」

ヘンリー「そんな事ありませんよ。私達だけでは普通の敵を倒すことも間々ならないのですから」

アテネ「それにしても・・・不思議ですわね？これほど大きな里ならば簡単に見つかってしまいそうなのに、それなのにエルフの里は見つからないなんて・・・」

歩きながら辺りを見回して云うアテネ。

アン「それは里全体に魔法が掛っているからなのです。一種の暗示のようなもので、里に近づくと無意識に引き返してしまうようになっているんです」

アテネ「それは中々に興味深い魔法ですわね」

ターニア「と云いますかアンさん・・・私達、物凄く見られている気がするのですけど・・・・・・」

エルフ達「ひそひそ・・・・・・」

アン「すみません・・・人間がこの里に入るなんて事は稀ですから、皆、警戒しているんです・・・・・・」

ナギ「ふぅん・・・・・・・・・」チラッ

エルフ達の方を見るナギ。

エルフ達「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

途端に目を逸らし鎮まるエルフ達。

ナギ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

再び正面を向くナギ。

エルフ達「ひそひそ・・・・・・・・」

ナギ「！」バッ

勢いよく再びエルフの方を向くナギ。

エルフ達「ひっ・・・・・・・！」

ナギ「・・・うん、面白いな」

ハヤテ「お嬢様・・・遊んでないで行きますよ・・・・・・」

アンに付いて行くと、緑に囲まれた玉座に座った、エルフの女王と思われる人物の元に辿り着いた。

アン「お母様、アンです。ただ今戻りました」

ナギ『お母さまって・・・アンってエルフの王女だったのか・・・・・・』

ターニア『と云いますか、何で私達は身を隠しているんですか?』

ターニアの云うように、今、ハヤテ達は茂みに隠れアンの様子を伺っている。

ヘンリー『すみません・・・私達が行き成り出て行っても話すら聞いてくれないと思うので・・・・・・』

ハヤテ『なるほど・・・・・・・・・』

アテネ『ハヤテ・・・貴方のその頭に付けている枝木は意味あるのですか・・・・・・?』

女王「おぉ!アン!アンなのですね!あぁ、母はどれ程貴女の事を心配したことか・・・・・・!」

アン「申し訳ありませんお母様・・・」

女王「ですが良かったです・・・此処に戻ってきてくれたと云う事は、漸く母の云う事を理解してくれたのですね」

アン「いいえお母様。私の考えは以前と変わりませんわ。此処に戻ってきたのはお母様にノアニールの村の呪いを解いてもらうお願いをしに来たのです」

女王「む・・・・・・・・」

アンの返事を聞いた女王は、先程までの笑顔から途端に表情が険しくなる。

アン「ヘンリー様。もう出てきても大丈夫です」

ヘンリー「女王様！何卒願いを聞き届けて下さい！！」

ヘンリーはアンの合図と共に飛び出し、女王にそう叫ぶ。

女王「お前は！えぇい、お前の顔など見たくもない！今すぐ私の前から姿を消せ！！」

ヘンリーの登場に女王の表情は更に険しくなる。

ヘンリー「そうは参りませぬ！お願いしますお義母様！！」

女王「お前などにお義母様と呼ばれる筋合いはない！」

ナギ「おぉ、まるで結婚を申し込む男とその相手のお父さんみたいなやり取りだな」

アテネ「まぁ、大して変わらないんじゃないですか？」

ターニア「わ、私もハヤテ様のお母様にあの様に邪険にされてしまうのでしょうか・・・・・・」

ハヤテ「皆さん・・・もう少しマシな事考えられないのですか・・・・・・？」

女王「何ですかアン・・・人間が増えていますが、どういう事ですか？」

ハヤテ達を見止めた女王がそう云う。

アン「この方達は、モンスターに攫われた私を助けてくださった方達です。お母様、決して人間は悪い者達だけとは限りません！この方達は、見ず知らずのヘンリー様の頼みでも、命を賭けて私を助けるのに力を貸してくださったのです！」

女王「私とて、この世界の全ての人間が悪だとは思いません。ですがそもそも、その男がお前を誑かして里の外に出さなければそんな事にはならなかった筈です」

アン「誑かすだなんて！私は自分の意思で里を出たのです！！」

女王「えぇい！何度云ったら貴女は解ってくれるのですか！？」

アン「お母様こそ私の話を全く聞いてくれないじゃないですか！？」

二人「――――――――――――――――――――！！」

ナギ「なぁ・・・これって私達、いる必要無くないか？」

白熱した云い争いを始めた二人を見て、ナギがそうハヤテ達に呟く。

ハヤテ「まぁ・・・これぱかりは親子の問題ですしねぇ」

ターニア「ですけど、私達は兎も角ヘンリーさんは話に参加しなくてもいいのですか？」

ヘンリー「え、えぇ・・・参加したいのは山々なのですが、私が話に参加しても状況が悪化するだけなので・・・・・・」

ナギ「あぁ・・・大変だな姑問題は・・・」

アテネ「ですがこのままでは埒が・・・ん？何かが此方に走っているようですけど・・・・・・」

一同「？」

アテネの言葉によりアンと女王以外が後ろを振り返ると、確かに何か――エルフ達が、それも集団で走ってきているのが見えてきた。

エルフ達「じょ～お～さま～！大変です！大変です！！」

女王「一体何事ですか！私は今アンと大事な話をしているのです！後にしなさい！！」

エルフ達「で、ですが！」

女王「ですがも何もありません！後にしなさい！命令です！」

エルフ達「は、はひぃ！！」

女王の凄まじい剣幕に気圧されるエルフ達。

アテネ「・・・で、実際何があったのですか？そんな大人数であんなに慌てて報告に来たと云う事は余程の事があったのでは？」

エルフA「ぅ・・・そ、それは・・・・・・」

行き成りアテネに喋り掛けられうろたえるエルフA。

ナギ「お前達、もしかして私達と話すと取って喰われるとか思ってないか・・・・・・？」

エルフ達「！」ブンブンッ

ナギの言葉にエルフ達は一斉に首を振り否定の意を見せる。

ターニア「でしたら普通に喋ってくれてもいいじゃないですか？」

エルフA「す、すみません・・・急に人間に話しかけられたので驚いてしまって・・・・・・」

アテネ「それは悪い事をしましたわ。ごめんなさい。それで、何があったのです？」

エルフA「そ、それが・・・・・・・・・」

エルフB「里の周りがモンスターに囲まれていまして・・・今にも里の中になだれ込んできそうなのです・・・・・・」

一同「・・・・・・・・・・へぇ、モンスターがねぇ・・・・」

エルフ達「はい、モンスターがです」

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

エルフ達「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・・・って、えぇ！？」

エルフ達「ひっ！！」

エルフ達の言葉に少し遅れて全員が驚く。その驚きにエルフ達も驚く、と云うか怯える。

ハヤテ「囲まれているって拙いじゃないですか！？」

エルフC「は、はい、ですから女王様に取り急ぎ報告をと思ったのですが・・・・・・」

エルフD「後にしろと仰られるのでどうしようかと・・・・・・」

エルフE「・・・あっ、里の中に入ってきました」

ナギ「「あっ」って、随分軽いな・・・ってか本当に囲まれてるし・・・・・」

辺りを見回すと、ハヤテ達は既に黒い影の様な者に囲まれていた。

「ふはははは！ご苦労だったな人間共！お前達のおかげでエルフの里の場所が簡単に解ったぞ！」

女王「何者です！？」

「おぉ、お初にお目にかかるエルフの女王。俺は魔王の影だ」

声の正体は、先程逃げた魔王の影だった。

女王「魔王の影・・・・・・？」

アテネ「魔王の影・・・付けられていましたか・・・・・・」

魔王の影「その通りだ人間。さっきは油断して遅れを取ったが、今度こそはそうはいかんぞ！」

女王「お前の目的は何なのですか？」

魔王の影「目的？そんなのは知れた事。この里のエルフ全員をバラモス様に献上する事！これだけのエルフがいれば俺の出世も間違いないからな！！」

女王「何ですって！？」

エルフ達「ひぃ・・・・・・」

魔王の影の言葉を聞き、驚愕する女王と怯えるエルフ達。

ハヤテ「そんな事させると思っているのですか？」

そんなエルフ達の前に武器を構えながら出てそう云うハヤテ。

魔王の影「ふんっ、云ったであろう、先程は油断していたと・・・今度は本気で行くぞ！！」

魔王の影がまた現れた。

ホロゴーストの群れが現れた。

シャドーの群れが現れた。

ハヤテ
ＨＰ１１１
ＭＰ　４４
勇　　１１

アテネ
ＨＰ５６
ＭＰ６８
魔戦１２

ナギ
ＨＰ　　２
ＭＰ２２０
遊　　１５

ターニア
ＨＰ３８
ＭＰ８６
僧　１０

ホロゴーストは様子を見ている。
シャドーは様子を見ている。
ターニアはマホカンタを唱えた！
ナギの前に輝く光の壁を作り出した。
ハヤテはディインを唱えた！
魔王の影に４２のダメージ！！
アテネはイオを唱えた！
魔王の影に２１のダメージ！！
ホロゴースト達に平均１７のダメージ！！
シャドー達に平均３０のダメージ！！
ナギはハヤテを応援した！
ハヤテのテンションが5上がった！
魔王の影はイオラを唱えた！
ハヤテに３３のダメージ！！
アテネに２８のダメージ！！

ターニアに３５のダメージ！！
光の壁が呪文を跳ね返した。
魔王の影に３９のダメージ！！
ハヤテ「拙いですね・・・前回は何気にギャグで流しましたけどコイツ結構強いんですよね・・・・・・」
ターニア「た、確かに、あのイオラは強力ですね・・・・・・」
ターニアはＨＰが残り少ないため辛そうにしている。
ハヤテ「だ、大丈夫ですかターニアさん？」
ハヤテはホイミを唱えた！
ターニアの傷が回復した！
ターニア「ご迷惑おかけして申し訳ありません・・・・・・」
ホロゴースト達は様子を見ている。
魔王の影はベホイミを唱えた！
魔王の影の傷が回復した！
ナギ「げっ、回復魔法まで使えるかよ・・・・・・」

魔王の影「ふはははは！私の力を見くびってもらっては困るぞ！やれ、シャドー達！」

シャドー達は一斉にヒャドを唱えた！

呪文が合わさりヒャドはヒャダルコになった！

ハヤテ「くっ・・・・・・！」

しかしハヤテが体を張って全員を守った！

ハヤテに77のダメージ！！

ナギ・アテネ・ターニア「ハヤテ（様）！？」

ハヤテ「だ、大丈夫ですか皆さん・・・？」

氷の刃によって傷つけられ血を流しながらハヤテが云う。

ナギ「いや、私達よりお前が大丈夫か・・・HPが1だし血だらけだし・・・・・・」

ハヤテ「あぁ、僕は大丈夫ですよ。こちらの世界に来る前にも日常的にHP1で血だらけでしたから・・・」

アテネ「それはそれでどうかと思いますけど・・・・・・」

ターニア「そ、そんな事より回復です！ホイミ！」

ターニアはホイミを唱えた！

ハヤテの傷が回復した！

ハヤテ「ありがとうございます・・・しかし、どうしますかね・・・・・・」

アテネ「確かに・・・今のはハヤテが受け止めてくれたから良いものの、もう一度受けるとどう考えても回復が追い付きませんわね・・・・・・」

魔王の影「どうした！？お前達の力はその程度なのか！？」

女王「・・・・・・皆の者、今の内に逃げますよ」

ハヤテ達の後ろで戦いを見ていた女王がエルフ達にそう云った。

アン「お母様！？あの方達をおいて逃げると云うのですか！？」

女王「そうですが、それがどうかしましたか？」

アン「そんな！あの方達は私達の為に戦っているのですよ！？それならば私達も出来るだけの手助けをするべきなのではないのですか！？」

女王「あの魔物が云うには、この里が見つかったのはあの人間達のせいらしいではないですか？でしたら助ける道理などありません」

アン「だからと云って今悪戯に動くのは危険すぎますわ！たとえど

んな理由があろうと民を思うのならば、今はあの方達と共闘すべきでは！？」

女王「・・・

ヘンリー「はは・・・これくらい、何ともないよ・・・・・・」

アン「そんなに血を流していて何ともない分けありませんわ！！」

氷の刃はヘンリーの胸のあたりに刺さりそのまま溶けてしまった為、ヘンリーの胸からはおびただしい量の血が流れている。

ヘンリー「私は、お前さえ守れたのなら・・・本望、だよ・・・・・・」

アン「そんな事云わないでください！私が生きていてもヘンリー様が死んでしまっては・・・・・・私は！！」

そこまで云って耐え切れなくなったのか泣き始めるアン。

女王「・・・何故だ、何故人間が・・・・・・人間・・・ヘンリーと云ったか」

ヘンリー「は・・・い・・・・・・」

ヘンリーはすでに血が足りなくなっているのか、目は焦点が合っておらず声も微かにしかでないなか、女王に返事をする。

女王「えぇい話しにくい！ベホマ！！」

女王はベホマを唱えた！

ヘンリーの傷が回復した！

ヘンリー「あ、あれ・・・？体が軽くなった・・・？」

アン「お母様・・・・・・？」

女王「聞くがヘンリーよ。何故己の命まで賭けてアンを助けたのだ？」

女王は真剣な表情で、アンに抱えながら横になっているヘンリーに尋ねる。

ヘンリー「それは勿論・・・アンを愛しているからです・・・！」

女王「愛・・・ではその愛とやらで、何があっても娘を守れると誓えるか？」

ヘンリー「最初から・・・そのつもり、です！」

まだ苦しそうであるが、力強く答えるヘンリー。

女王「ふんっ、生意気な・・・・・・・・・」

女王はそう云いながらゆっくりと歩き始めた。

アン「お母様・・・？ど、どちらに行くのですか・・・・・・？」

女王「この面倒事を片づけに行くだけです・・・・・・このままではゆっくり話も出来ませんからね」

魔王の影「どうした！？お前達の力はその程度なのか！？」

女王「ベホマラー！」

女王はベホマラーを唱えた！

ハヤテ達の傷が回復した！

魔王の影「な、何だっ！？」

ハヤテ「女王！？何故貴女が・・・・・・」

アテネ「高みの見物を決めていたのではないのですか？」

女王「少しばかり状況が変わったまでだ・・・お前達に死なれては困るんでな。エルフは回復魔法と補助魔法しか使えぬが、里の者全員でお前達の手助けをしてやろう。よいな皆の者！」

エルフ一同「は、はい！！」

ターニア「エルフの皆さんが手伝ってくれるのなら百人力ですね！！」

ナギ「おぉ！勝ったも同然だな！！」

ハヤテ「お、お嬢様・・・それはいくらなんでも・・・・・・」

アテネ「ですがこれで攻撃に専念できますわ」

魔王の影「ぐぬぬ・・・だが所詮はエルフ！者共、蹴散らしてしま

え！！」

アテネ「そうはさせませんわ！今は私達のターン！！」

魔王の影「しまった！」

アテネはイオを唱えた！

魔王の影に２３のダメージ！！

ホロゴースト達に平均１６のダメージ！！

シャドー達に平均３２のダメージ！！

ナギはハヤテを応援した！

ハヤテのテンションが５上がった！

ハヤテはデインを唱えた！

魔王の影に４３のダメージ！！

ターニアはバギを唱えた！

シャドー達に平均２４のダメージ！！

シャドー達をやっつけた！

魔王の影「シャドー！！ぐぬぬ・・・こうなればホロゴースト！お前達の力を見せてやれ！！」

ホロゴースト達は一斉にザキを唱えた！

ハヤテ達に死の呪文が襲いかかる！

しかしハヤテには効かなかった！

しかしアテネには効かなかった！

しかしターニアには効かなかった！

光の壁が呪文を跳ね返した。

ホロゴースト達の息の根を止めた！！

魔王の影「おいぃ！何やってんだよお前達は！？」

ナギ「完全に自滅だな」

ハヤテ「まぁ、ザキでは良くあることですよ。自分が使っても全然効かないのに、敵が使うとこちらは全滅・・・なんて事は」

アテネ「2から9までどれだけ苦しめられた事か・・・特にミミックやパンドラボックスなんて未だに好きになれませんわ」

ターニア「後、ＡＩの作戦設定には気をつけましょうね」

魔王の影「くっ・・・仕方ない、まずはベホイミで回復をして態勢を・・・」

女王「そうはさせませんわ！皆の者！！」

エルフ達「はい！」

エルフ達はマホトーンを唱えた！

魔王の影の呪文を封じ込めた！

魔王の影「しまっ・・・！」

魔王の影はベホイミを唱えた！

しかし呪文は封じ込まれている！

女王はバイキルトを唱えた！

ハヤテの攻撃力が2倍になった！

女王「さぁ、人間よ！とどめを刺してしまいなさい！」

ハヤテ「はい！」

魔王の影「ま、拙い！このままでは・・・る、ルーラ！」

魔王の影はルーラを唱えた！

しかし呪文は封じ込まれている！

ハヤテの攻撃！

魔王の影に１０２のダメージ！！
魔王の影をやっつけた！
それぞれ８７３の経験値を獲得！
ハヤテはレベル１３に上がった！
最大ＨＰが６ポイント上がった！
最大ＭＰが１１ポイント上がった！
アテネは１４レベルに上がった！
最大ＨＰが８ポイント上がった！
最大ＭＰが１９ポイント上がった！
アテネはボミオスを覚えた！
ナギはレベル１７に上がった！
最大ＨＰが０ポイント上がった！
最大ＭＰ４０ポイント上がった！
ターニアはレベル１２に上がった！
最大ＨＰが１０ポイント上がった！
最大ＭＰが１７ポイント上がった！
ナギ「今度こそ倒したようだな・・・」
前回の事があるので、ナギはハヤテに確認するように云う。
ハヤテ「えぇ、そのようです」
ターニア「流石ハヤテ様！最後の一撃、とても格好良かったです！

！」

アテネ「貴女は戦闘が終わると毎回似た様な事云ってますわね」

女王「ふぅ・・・・・・」

アン「あ、あの、お母様・・・・・・」

戦闘が終わり一息をついていた女王の元に、まだ足元が覚束ないヘンリーに肩を貸しながらアンがゆっくりと歩いてきた。

女王「アン・・・怪我はありませんね？」

アン「は、はい・・・あの、ありがとうございます。ヘンリー様を助けてくれて・・・」

ヘンリー「お義母様のおかげでアンを置いて死なずに済みました。本当にありがとうございます」

女王「だからお前にお義母様と云われる筋合いは無いと云っておろう・・・お前を助けたのも、お前が死ねばアンが悲しむからこそ・・・ただそれだけだ」

アン「お母様・・・・・・」

女王「それと人間達。お主達には世話になったな・・・今さらではあるがお主たち、名はなんと申す？」

女王はハヤテ達に向きなおり云う。

ハヤテ「ハヤテと云います」

ナギ「ナギだ」

アテネ「アテネですわ」

ターニア「ターニアです」

女王「ハヤテ、ナギ、アテネ、ターニアか・・・改めて礼を云おう。お主たちのおかげでエルフの里は救われた。ありがとう」

エルフ達「ありがとうございます！！」

ハヤテ「いえいえ、これも皆さんの助けがあってこそですから」

女王「そうであっても、だ。お主たちには借りが出来てしまったな・・・何か望みがあれば、私達エルフの叶えられる範囲の望みならば聞き届けてやるが、何かあるか？」

アテネ「でしたら、ノアニールの呪いを解いて下さいませんか？呪いを掛けた本人ならば、また呪いを解くことくらい容易でしょう？」

女王の言葉にすかさずアテネが答える。

女王「ふむ、確かアンも最初そのような事を云っておったな・・・うむ、相解った。直ぐにでも呪いを解いてやろう」

アン「お母様！よろしいのですか！？」

女王「里の恩人の頼みとあらば無碍には出来ませんからね」

アン「お母様・・・良かったですねヘンリー様！」

アンは心底嬉しそうにヘンリーに向かって云う。

ヘンリー「あぁ、本当に良かった・・・」

こちらは安心したように笑顔で答える。

女王「しかし、それだけでは気が済まぬな・・・何か他に望みはないか？」

ナギ「他に？」

ターニア「あっ！ありますあります！お願いありますよ！！」

何かを思いついたようにターニアが云う。

女王「うむ、何でも申してみよ」

ターニア「はい！是非ともアンさんとヘンリーさんの結婚を許して差し上げて下さい！」

一同「へっ？」

ターニアの予想外のお願いに全員が間の抜けた返事をする。

アテネ「ちょっ、何を云っているんですか貴女は！？」

ターニア「えー、でも、お二人には幸せになって欲しいじゃないで

すか？」

ナギ「いやまぁ、そうだけど・・・・・・」

アン「お、お母様・・・？」

アンは女王の様子を窺うように問いかける。

女王「な、何を戯けたことを云うか！その様な事・・・・・・いや、しかしこれは里の恩人の頼み・・・だがしかし、むぅ・・・・・・」

一同「・・・・・・・・・・・・・・・」

女王「・・・・・・だがやはり恩人の頼みとあらば、うむ、仕方ない、これも恩人の頼みなのだ、致し方ないことなのだ・・・・・・よい！お主のその願い、聞き届けてやろう！」

暫く頭を抱えて悩んでいた女王は、バッと頭を上げそう云った。

ターニア「本当ですか！？良かったですねお二人とも！」

アン「は、はい！ですけど本当に宜しいのですかお母様？」

女王「えぇ、私に二言はありません。ですが条件があります」

アン「条件、ですか？では、その条件とは・・・？」

女王「あなた達二人がこの里に住む事。それだけです」

アン「お母様・・・ヘンリー様！宜しいですか？」

アンは女王の言葉を聞き、嬉しそうにヘンリーに確認を取る。

ヘンリー「勿論だとも。結婚を認められ、その上この里に住めるだなんて、願ったり叶ったりだ！これも一重にハヤテ様方のおかげだ、本当にありがとうございます！」

アン「そうですね。ありがとうございます！」

ヘンリーは支えられながら、アンは支えながらハヤテ達に頭を下げる。

ハヤテ「い、いえ、僕は何も・・・お礼を云うならターニアさんに云ってください」

アテネ「ですわね、私はこんなお願い思いつきませんでしたもの」

ナギ「お前もまぁまぁ役に立つんだな。見直したぞ」

ターニア「まぁまぁって何ですか・・・今まで私の事どう思ってたんですか・・・・・？」

ナギ「基本的に普通の奴だけど、ハヤテの事になると暴走する変態な痴女」

ターニア「誰が変態ですか！私は断じて変態じゃありません！！」

アテネ「痴女は否定しないのですね・・・」

ハヤテ「良い雰囲気だったのに最後の最後で台無しですよ皆さん・・

・・・・・・・」

女王「さて、話も纏まった所で、お主たちが良ければ今日はこの里で持成すが如何する？」

ハヤテ「い、いえ、そこまでしていただくのは申し訳ありませんよ・・・」

女王「そうか？だが、私としてはエルフ達が少しでも人間に慣れる為に、お主たちにはいて欲しいのだがな・・・」

ハヤテ「は、はぁ、そう云う事なら・・・皆さん、如何しますか？」

女王の言葉にハヤテは、他の三人に確認を取る。

アテネ「まぁ、そう云われるのでしたら・・・・・・」

ナギ「朝から戦いっぱなしで疲れたしな・・・・・・」

ターニア「私も異存は・・・・・・」

三人とも肯定の意を述べようとしたのだが・・・・・・

エルフ達「ひそひそ・・・・・・」

ナギ・アテネ・ターニア「！？」

後ろにいたエルフ達の囁きが聞こえ、言葉を止める。

エルフA『・・・あの、ハヤテさんって人、凄かったよね？』

エルフB『うんうん！最後の一撃・・・格好良かったなぁ』

エルフC『で、でも、それでも人間なんだよね・・・・・・』

エルフD『馬鹿！たとえ人間でもハヤテさんなら信用できるでしょ？大切なのは種族じゃなくて中身よ！』

エルフC『た、確かに・・・・・・』

エルフE『女王様もアン様のご結婚をお許しなったし、絶対ハヤテさんなら反対されないわよっ！』

エルフF『だけど、ハヤテさんにはあんなに綺麗な人間が三人も付いているけど・・・・・・』

エルフG『何を臆しているのエルフF！人間とは云え所詮は女性が三人。ならば今夜、里の民全員で何とかして抑えつけて、その間にハヤテさんと既成事実を作る！』

エルフH『成程・・・既成事実さえ作ってしまえばハヤテさんは里から出られなくなる、そうなれば後は此方の物、と』

エルフG『その通り！何か異存のある者はいる？』

エルフ達『・・・・・・・・・・・・・・』

エルフG『よし！じゃあ、この作戦で行くわよ！』

エルフ達『おぉーー！』

ナギ・アテネ・ターニア「・・・・・・・・・・・・・」

ハヤテ「あの・・・皆さん、如何しました？急に黙り込んで・・・・・・」

ハヤテは訝しげに三人に問いかける。

アテネ「よし、帰りますわよハヤテ」

ハヤテ「えっ？だ、だけど・・・・・・・」

ターニア「だけども何もありませんハヤテ様。私達には魔王を打ち倒すと云う大変な使命があるのです。世界の人々の為にものんびりしている暇はありません」

ハヤテ「そ、そうですけど・・・・・・・」

ナギ「では、そうと決まれば馬車に戻るぞ」

そう云い、馬車の方へ向かおうとする三人。

ハヤテ「み、皆さん、確かに急ぎの旅かもしれませんけど適度な休養も大切かと・・・・・・・」

ナギ・アテネ・ターニア「ハヤテ（様）・・・・・・・」

ハヤテ「は、はい・・・・・・・？」

ナギ・アテネ・ターニア「つべこべ云ってないで、とっとと帰るぞ

（りますわよ）（りますよ）！！」

ナギ・アテネ・ターニア（これ以上厄介な敵を増やして堪るか（りますか）・・・！）

振り返った三人は、有無を云わさぬ恐ろしいオーラでハヤテにそう云う。

ハヤテ「・・・・・・はい」

そんな三人にハヤテが反論できるはずもなく、後ずさりながら肯定の意を示す。

ハヤテ「え、えっと、申し訳ないのですが女王様、僕達は直ぐにでもこの里を出立しようと思います・・・」

女王「そうか・・・残念ではあるがお主たちにはお主たちの事情があろうからな、此方の都合で無理に引きとめたりは出来ぬ・・・・・」

ハヤテ「すみません・・・・・・」

女王「よいよい。そうだな、代わりと云っては何だが、お主にこれを授けよう」

女王はそう云いながら、吸い込まれるほど紅く美しい色をした宝石を取り出しハヤテに手渡した。

ハヤテ「これは・・・・・・？」

女王「それは夢見るルビー。そのルビーがあればこの里に掛っている呪文に惑わされることなく里に入る事が出来る。もし困った事があれば何時でも再びこの里を訪れるが良かろう」

ハヤテ「女王様・・・ありがとうございます」

女王「うむ。それでは皆の者、ハヤテ達を見送ってあげなさい」

アン「本当にお世話になりました！」

ヘンリー「皆さんの武運をお祈りしています！」

エルフ達「うぅ、ハヤテさん、またいらして下さいね！！」

ハヤテ「えぇ、勿論ですよ」

ハヤテ（でも、何で僕限定・・・？）

ナギ・アテネ・ターニア「早く行くぞ（ますよ）ハヤテ（様）！」

ハヤテ「は、はい！では、皆さんお元気で！」

こうしてエルフの里の騒動を収めたハヤテ達は、再び魔王討伐の旅を開始した。

第十一話「エルフの里」（後書き）

やっとノアニールの話が終わった・・・・・・

次からはアッサラームの話か、飛ばしてイシスの話にしようかと思っているのですが、私なりにもっと遊んでみたいなぁと思います。

第十二話「イシスの国」（前書き）

約2週間ぶりの更新ですね・・・・・・
最近は花粉が辛くて困ります・・・・・・

第十二話「イシスの国」

ナギ「・・・ハヤテぇ、のどが渇いたぞ・・・・・・・」

ハヤテ「それを僕に云いますか・・・アーたん、お嬢様に水を飲ませてあげて・・・」

アテネ「またですか・・・そろそろ朝からの戦闘と飲み水の確保でMPが限界ですよ・・・・・・ヒャド」

アテネが呪文を唱えると、馬車の中に氷に塊が現れる。

ナギ「おぉ、流石はアテネ・・・うむ、冷たくて美味しいぞ♪」

アテネ「本当に貴女は我が儘ですわね・・・・・・はぁ、ターニアさん、ハヤテにもこのコップに氷の破片を入れて渡してあげてください。暑さで直ぐに融けるでしょうから」

ターニア「解りました！・・・ん・・・よし！はい、ハヤテさんどうぞ！」

ターニアはアテネに云われた様に、氷を適度な大きさに砕きコップに入れ、それをのぞき窓からハヤテに手渡す。

ハヤテ「ありがとうございます・・・・・・それにしても・・・」

コップを受け取り、ハヤテは手を翳しながら空を見る。

空には雲一つ無く、太陽が燦々と・・・いや、それを通り越してジ

リジリと照りつけている。

ハヤテ「・・・・・・暑い」

空を見上げるのを止め再び正面を向く。

正面・・・と云うか３６０。何処を見ても黄色・・・・・・ハヤテはかれこれ朝からずっと代り映えのしないこの景色を見ている。

そう、ハヤテ達は今、砂漠のど真ん中にいた。

アテネ「ところでハヤテ、まだイシスの国は見えませんの？」

ハヤテ「うん・・・残念な事に未だに見渡す限り砂しか見えないよ・・・・・・」

ターニア「大丈夫ですかハヤテ様？」

ハヤテ「えぇ、まぁ、何とか・・・・・・」

そうは云ったものの、流石のハヤテもこの焼ける様に暑い中執事服を着て、しかもずっと同じ景色を見続け気が滅入ってきていた。

ハヤテ「やっぱり、アッサラームで道案内を頼むべきだったのでは・・・・・・」

ナギ・アテネ・ターニア「それは駄目！」

ハヤテ「えぇ、それは散々アッサラームで聞きましたよ・・・一体何が駄目なんでしょうかね？良い人そうだったのに・・・・・・」

ナギ（だって明らかにあの女、ハヤテに惚れていただろう・・・・・・）

アテネ（そんな人に道案内を頼める訳がないじゃないですか・・・・・・）

ターニア（何でハヤテ様は行く所行く所フラグを立てるのですか・・・・・・まぁ、私もフラグを立てられた一人ですけれども・・・・・・）

ハヤテ「はぁ・・・・・・・・・ん？あっ！あれじゃないですか！？　あそこに見えるがきっとイシスのお城ですよ！！」

ナギ「本当か！？」

ナギは嬉しそうにのぞき窓から顔を出すと、小さくではあるが確かに、前方に城のような建物と緑が見えていた。

ナギ「おぉ、半日ぶりの緑！よし、ハヤテ！全速力で向かうのだー！」

ハヤテ「ぜ、全速力ですか・・・・・・」

足場の悪い砂漠の中で無茶な注文であったが、自分としてもこの環境から一刻も早く抜け出したかったのでハヤテは出来る限りスピードを出しイシスへと向かった。

イシスの国――――――

そんな事を話しながら歩いていると広場のような場所に人だかりができているのが見えてきた。

アテネ「何かあったのですかね？」

ハヤテ「みたいですねぇ・・・・・・すみません。この人だかりは何なのですか？」

アテネの呟きに応え、ハヤテは人だかりの中にいた一人の詩人風の男性に声を掛ける。

詩人「ん？あぁ、君達は旅の方か。実は最近この国では厄介な事件が起きていてね・・・その事件を解決する為に国が冒険者を集う事になってね。あれはそれを知らせる御触れの看板さ」

ナギ「ふーん・・・で、その事件って何なんだ？」

詩人「これだよこれ、これが夜な夜な人攫いを行っているんだ」

そう云いながら詩人は腕を中途半端に上げ、かつ手首を脱力させたポーズを取り、少しだけ暗い雰囲気を纏わせる。

ターニア「まさかそれって・・・・・・」

詩人「幽霊だよ。少し前から女王様のお父上の先王様・・・ファラオ王様と云うのだけど、そのファラオ王様の亡霊が夜な夜な現れては人を攫って行っているんだ」

ナギ「ゆゆゆゆ幽霊！？」

自分から聞いた内容が、ナギにとって苦手な分野だった為堪らずハヤテの腕にしがみ付く。

詩人「まぁ、そう云う訳だから君達が腕に覚えがあるのなら関わるのも良いかもしれないが、そうでないなら悪い事は云わない、早々にこの国から出た方が良い・・・君達ならば特に・・・・・・」

そう云って詩人は広場から去って行った。

ハヤテ「だそうですけど、如何しますか？」

アテネ「勿論関わるに決まっていますわ」

ハヤテ「あぁ、やっぱり・・・」

ターニア「では、早速イシスのお城に向かいましょう！」

そう云ってアテネとターニアは歩を進める。

ハヤテ「はぁ、何か嫌な予感が・・・いやまぁ、相手が幽霊って時点で十分アレだろうけど・・・・・・と云いますかお嬢様、流石に痛いです」

ナギ「うぅ・・・・・・！」

ハヤテ「ちょっと！何で云ったそばから更に力を強めるんですか！？大丈夫ですよまだ昼間何ですから！」

そんなこんなでハヤテ達はまずイシスの城へと向かって行った。

イシスの城・王の間――――――

アテネ「女性」

ターニア「４人？」

女王「如何したのですか？」

ハヤテ「ちょ、ちょっと待ってください！僕は男ですよ男！」

女王・兵士達「えっ？」

慌てて間違いを訂正するハヤテに対して女王達は首を傾げる。

ハヤテ「「えっ？」って何で解らないのですか！？」

女王「いえ、貴方達は御触れを良く見なかったのですか？」

ナギ「御触れ？」

女王「えぇ、御触れではお父様の亡霊を退治してくれる冒険者を集うと書きましたが、それは女性限定でと書いたのですよ。ですから私達は皆さんが女性だと・・・・・・」

ターニア「あー・・・そう云えば私達、あの詩人さんから話を聞いただけでしたね」

アテネ「でも、あの詩人の男が私達に退治の仕事を進めたって事は、少なくともあの詩人は私達全員が女だと思っていたってことですわよね？」

ハヤテ「うっ！」

アテネの言葉がハヤテに突き刺さる。

ナギ「って云うか、何で女限定何だ？」

女王「それがですね・・・お父様の亡霊は女性を攫っていくのですが、男性は問答無用で呪い殺してしまうのです・・・・・・ですから国の兵士達では太刀打ちできないので冒険者を集っていた訳なのですよ」

ターニア「それはまた・・・何と云いますか・・・・・・」

ハヤテ「ですけど、そう云う事なら僕たちでは力になれませんね。残念ですけど行きましょう皆さん」

そう云って後ろを向き、王の間を出ていこうとするハヤテだった・・・・・のだが。

ガシッ！

ハヤテ「えっ？」

何故か満面の笑みを浮かべた3人に肩を掴まれ動きが止まる。

ハヤテ「えーと・・・何だか物凄い嫌な予感かしかしないのですけど一応聞きますが・・・・・・如何しましたか皆さん？」

アテネ「大丈夫ですわハヤテ♪」

ナギ「お前なら女装すれば問題ないって♪」

ターニア「前から似合うと思っていたんですよ♪」

ナギ・アテネ・ターニア「だから（ですから）取り敢えずこれに着替え（よう）ましょう？」

3人の手にはいつの間にか多種多様な衣裳が・・・・・・

ハヤテ「い、いや、皆さん？此処、一応王の間ですよ？こんな所で着替えるだなんて女王様に失礼じゃ・・・・・・」

女王「あぁ、私は全然構いませんよ？何でしたら侍女に手伝わせますが？」

ナギ・アテネ・ターニア「是非お願いします！」

ハヤテ「ちょっと！？」

女王「では皆さん。一応衣装室に連れて行ってあげてください。其方の方が服も沢山ありますし」

侍女達「はいっ♪」

ハヤテ「何で貴女達まで嬉しそうにしているんですか！？ちょ、本当に待ってください！」

そんなハヤテの抵抗虚しく、両手両足を持たれ王の間の隣にある衣装室に連れ去れる。

ナギ「大丈夫だ、その内馴れるって♪」

アテネ「痛いのは最初だけですわ♪」

ターニア「さぁさぁ、観念しましょうね♪」

ハヤテ「い、嫌あああぁぁぁぁぁ！！！！！」

昼下がりのイシスの国。

その城下町にはどう聞いても女性の声としか思えない悲鳴が木霊していた。

第十三話「真夜中のイシス」

ハヤテ「うぅ・・・もうお婿に行けません・・・・・・／／／／／／／／」

そう涙目＋真っ赤な顔で云うハヤテは今、何時だったか咲夜が着ていた様なバニースーツを着、ご丁寧にトレイまで持っていた。

アテネ「だ、大丈夫ですわ。その時は私が貰いますから」

鼻血を出しながら若干ヤバい目をしながらアテネが云う。

ハヤテ「あ、アーたん・・・こ、怖いよ？」

ナギ「アテネが嫌なら私でも良いぞ！むしろ私の婿のなれ！」

ターニア「お二人もずるいですよ！ハヤテ様、ぜひ私のお嫁さんになってください！」

こちらもアテネと同じようにしながらハヤテに云う。

ハヤテ「お、落ち着いてください！そもそもターニアさん、僕はお嫁さんにはなれません！」

女王「おぉ、似合っていますね。これならばお父様の亡霊も貴女が男だとは気付かないでしょうね」

ハヤテ達のやり取りを見ながら女王は微笑みながら云う。

ハヤテ「嫌ですからね！こんな恰好で外に出るだなんて！と云いますか、執事服に戻らさせていただきますからね！」

そう云いながら頭の上に装備されたうさみみバンドに手を掛け外そうとしたのだが・・・・・・

ハヤテ
装備
Eはがねのつるぎ
Eシルバートレイ
Eうさみみバンド↑
Eバニースーツ

Eあみタイツ
Eハイヒール
Eうさぎのしっぽ

うさみみバンドを外しますか？
はい　↑
いいえ

それを外すなんてとんでもない！

ドラクエではお馴染みの、呪われた装備品を外そうとした時のような音楽と共にそんなメッセージが現れた。

ハヤテ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

うさみみバンドを外しますか？
はい　↑

いいえ

それを外すなんてとんでもない！

同様の効果音とメッセージ。

ハヤテ「何なんですか！？それを外すなんてとんでもないって！？」

ナギ「似合ってるって証拠じゃないか？」

ハヤテ「だからって外せないのはおかしいでしょう！？」

ナギ「まぁ、別にお前がそのバニー装備が嫌だって云うならこんなのもあるぞ？」

ナギの手には何だか極端に布の少ない水着が。

アテネ「ちなみに私はこんな物を」

アテネの手には踊り子が来ていそうなこれまた布の部分が少ない服が。

ターニア「私としてはこれがお勧めですよ？」

そしてターニアの手にはピンク色をしたビスチェが。

ハヤテ「せめてメイド服とか出してくれれば悩めたのですけどねぇ・・・・・」

ナギ・アテネ・ターニア「えっ？じゃあ此処にメイド服一式が・・・

」

ハヤテ「着ませんよ！もういいですよコレで！我慢しますから！」

ナギ・アテネ・ターニア「なんだぁ・・・折角目覚めてくれたかと思ったのに・・・・・・」

ハヤテの言葉に3人は心底残念そうに云う。

ハヤテ「何が目覚めると思ってたんですか・・・・・・・・・」

女王「さて、その様子ならば大丈夫でしょうね。亡霊がやってくるのは夜です。それまでこの城でゆっくりしていてください・・・大臣、皆さんを空いている部屋に案内して差し上げなさい」

大臣「はっ！」

ハヤテ「あっ、最後に一応聞いておきたい事があるのですけど・・・」

大臣に案内され王の間を出ようとすると、ハヤテが結構シリアスそうな顔で女王に問いかける・・・が、格好が格好なだけに全然様にならない。むしろ可愛い。

女王「何ですか？」

ハヤテ「いえ、亡霊とは云え実のお父様を討伐する事に抵抗は無いのかと・・・・・・」

女王「そうですね・・・抵抗が無いと云えば嘘になりますが・・・

だからと云ってこのままお父様の亡霊を捨て置いては民の害にしかなりません。民の事を一番に考えてこそが君主の務めですから致し方ありません」

先程までの笑顔とは違い、若干苦しそうな笑顔で答える女王。

ハヤテ「そうですか・・・すみません余計な事を聞いてしまって。では、行きましょうか」

ハヤテ達は王の間を後にした。

あっ・・・と云う間に日は沈み、イシスの国全体に夜の帳が下りる。昼間は涼しかったオアシスの気温も今となっては少しばかり肌寒いものに感じられる。

ハヤテ「いや・・・少しって云うか、普通に寒いです」

相変わらずの姿で自分を抱きしめるようにしながらハヤテが呟く。

アテネ「それは、そんな格好をしていれば当たり前でしょう？」

ハヤテ「誰のせいでこんな格好になったと思ってるの？」

アテネ「・・・・・・・・・」

ハヤテのジト目にアテネは無言で目を逸らす。

ターニア「寒いのでしたら一応此処に先程のメイド服がありますけど上着として如何ですか？私としてはうさ耳メイドも中々良いと・・・」

ハヤテ「・・・・・・いえ、遠慮しておきます。何だか自分からそれを着ると自分の中の何かが終わってしまう気がするので」

微妙に悩んだが結局断るハヤテ。

ターニア「残念です・・・・・・」

ハヤテ「何ですか残念って・・・・・・っ、ひゃう！？」

ターニアの答えに呆れていたハヤテだったが、突然そんな奇声を上げた。

ナギ「うぅ・・・・・・ハヤテぇ」

ハヤテ「ちょ、お嬢様！？しっぽは！しっぽは掴まないでください！あれ？と云いますかこのしっぽ作りものですよね！？なのに何故！？」

そう云いながら身を捩るハヤテ。

アテネ「そう云えばその装備一式について着替えを手伝っていた侍女の一人が何か云っていたような・・・・・・何でしたっけ？」

ターニア「確か・・・『そのバニー装備一式には装備すると装備者と神経みたいなもので繋がって本物みたいなり、かつ脱ぐ事が出来

なくなると云う魔王軍の新素材&呪いが使われてるので気を付けてください』・・・って云ってましたね」

ハヤテ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アテネ「あぁ、そうでしたわ。大した事じゃないと思ってすっかり忘れていましたわ」

ハヤテ「忘れるなあああぁぁ！何なんですかそのとんでもない事実は！？じゃあ最初にこのうさみみが取れなかったのも呪いのせいじゃないですか！！」

ターニア「そうなりますねぇ」

ハヤテ「つーか魔王軍も何やってんだよ！？何無駄に新素材とか呪いとか使ってんだよ！？って云うかそもそも何故そんな物がイシスの国に有った！？」

アテネ「さぁ？と云いますかハヤテ、口調がおかしくなっていますわよ？」

ハヤテ「そりゃ口調もっ！ひゃう！？お、お嬢様・・・！」

ナギ「ハヤテぇ、今、風がヒュウって・・・」

そう云いながら両手で力の限りハヤテのしっぽを握りしめるナギ。

ハヤテ「ちょ！本当に、駄目ですって・・・！そんな、力いっぱい・・・掴まれたら・・・力が・・・・・・」

ハヤテはへなへなとしゃがみ込んでしまう。

ナギ「あれ？は、ハヤテ？」

ターニア「おぉ！まるで仮面を付けた孫悟飯に尻尾を掴まれた孫悟空みたいですね！」

アテネ「確かにそう見えますけど・・・貴女は此方の世界の人でしたよね？なのに何故そんな例えが出てくのですか？」

ターニア「それは気にしたら負けって奴じゃないですか？」

アテネ「あぁ、まぁ確かに・・・・・・」

ハヤテ「・・・と云いますか、出来れば助けて、欲しかったですね・・・お二人とも・・・・・・」

そんな話をしていた二人にいつの間にか立ち上がっていたハヤテが微妙に責める様に云う。ちなみにナギにはしっぽではなく手を握ってもらっている。

アテネ「あら？もう復活したの？」

ハヤテ「えぇ、多少膝が笑ってるけど・・・・・・」

ターニア「じゃあまだ襲う事m――って痛！何で叩くんですかアテネさぁん」

ハヤテにとって何か不穏な事を云おうとしアテネに叩かれたターニアは、頭を押さえながら若干涙目で抗議の声を上げる。

アテネ「いえ、発情していたようなので躾けなければと思いまして」

ターニア「酷いです！そもそもあんなえっちぃハヤテ様を見てそそらないと云う方がおかしいんですよ！アテネさんは何も感じなのですか！？この胸の奥から沸々と湧き上がる――って痛い！だから何で叩くんですかぁ」

アテネ「その気持ちは解りますけど、もう少し貴女は自重しなさい・・・勢いに任せて何を口走る気ですか・・・・・・」

ハヤテ「お二人とも仲が御宜しくて結構ですねぇ・・・・・・むむ？」

そんな二人を呆れ＋若干の身の危険を感じながら見ていたハヤテだったが、突然何かを感じたように空を彼方を見上げる。

ハヤテ「何かが来ますね・・・・・・」ピクピク

ハヤテの緊張を表すかのように先程まで垂れ下がっていたうさみみがピンと立つ。

アテネ「そのうさみみ、意外と便利ですね・・・」

ターニア「出来ればそのうさみみを愛でたい所ですけど、そうもいかないみたいですね・・・」

そう残念そうにターニアが呟くと、ハヤテ達の前に人の形をした青白く半透明な何かが舞い降りた。

ハヤテ「いや、青白く半透明な何かって、この状況では幽霊しかあり得ないじゃないですか・・・・・・」

アテネ「で、貴方がファラオ王の亡霊なのですか？」

アテネが亡霊に問いかける。

亡霊「ぁ・・・人間、女・・・攫ぅ・・・・・・」

ターニア「うーん、何か全然通じてないみたいですねぇ・・・」

アテネ「ふむ、ま、どちらでも構いませんわ。どの道倒すだけですし」

亡霊「刃向かう、奴・・・倒す・・・・・・」

ファラオ王の亡霊が現れた。

ハヤテ
ＨＰ１１７
ＭＰ　５０
勇　　１３

アテネ
ＨＰ６４
ＭＰ８７
魔戦１４

ナギ
ＨＰ　　２

ＭＰ２６０
きぜつ

ターニア
ＨＰ　４８
ＭＰ１０３
僧　１２

ハヤテ「ってお嬢様！？しっかり！しっかりしてくださいお嬢様！！」

ナギ「きゅ～・・・・・・」

アテネ「あぁ・・・遂に実物を見て気絶してしまいましたか・・・・・・ハヤテ、ナギさんは取り敢えず後ろに置いておきなさい」

ハヤテ「う、うん・・・・・・」

亡霊の攻撃！

ターニアに３５のダメージ！！

ハヤテはデインを唱えた！

亡霊に２９のダメージ！！

アテネはヒャドを唱えた！

亡霊に３３のダメージ！！

ターニアはバギを唱えた！
亡霊に１９のダメージ！！
亡霊はマホトーンを唱えた！
ハヤテの呪文を封じ込めた！
アテネの呪文を封じ込めた！
ターニアの呪文を封じ込めた！
アテネ・ターニア「あっ・・・」
ターニアはホイミを唱えた！
しかし呪文は封じ込まれている！
アテネはヒャドを唱えた！
しかし呪文は封じ込まれている！
ハヤテの攻撃！
亡霊に３２のダメージ！！
亡霊の攻撃！
痛恨の一撃！　アテネに６３のダメージ！！

ターニア「あわわわ！大丈夫ですかアテネさん！？」

アテネ「え、えぇ、まぁ、何とか・・・・・・」

ターニア「どどど如何しましょうハヤテ様！？私、魔法が使えないとてんで役に立てないのですけど！」

ハヤテ「と、取り敢えず落ち着いてください・・・」

アテネ「ハヤテ・・・兎に角、マホトーンの効果が切れるまで何とか亡霊の動きを止めるのよ・・・」

ハヤテ「動きを止めると云っても・・・・・・」

ハヤテ（そんな便利なコマンド・・・有ったっけ・・・・・・？）

→たたかう
　にげる
　さくせん

　こうげき
　じゅもん
　ぼうぎょ
→とくぎ
　どうぐ
　そうび

　かばう
　におうだち
　はやぶさぎり

↓ぱふぱふ

ハヤテ（・・・・・・・・・・・・・・・）

アテネ・ターニア「ハヤテ（様）？」

ハヤテ（何時の間にこんな特技が・・・って云うかこれをやれと？いやいや・・・これは、ない・・・よな？確かに無駄に胸にパッドとか着けさせられたから出来ない事もないけど・・・・・・いや、一応僕にも男してのプライドが・・・・・・）

亡霊「・・・ぅぁ・・・・・・！」

正面には敵。

アテネ「・・・くっ・・・げほっ・・・」

隣には残りＨＰが１で瀕死状態のアテネ。

ターニア「あぁ！あまり動かないでくださいアテネさん！」

それを抱え必死に介抱するターニア。

ナギ「きゅ～・・・・・・」

後ろには目を回し気絶しているナギ。

ハヤテ（プライドが・・・・・・）

アテネ「げほっげほっ・・・ですけど・・・・・」

ターニア「きっとハヤテ様が何とかしてくれますから！もう少しの辛抱ですよ！」

・・・・・・さぁ、どうする？

ハヤテ「プライドで生きていけるかああぁぁぁ！」

ハヤテはファラオ王の亡霊にぱふぱふをした！

ハヤテ（うぅ・・・何で無駄に胸にまで感覚が・・・・・・）

ファラオ王の亡霊は気持よさそうだ！

ハヤテ「はぁ・・・何か色々と失った気がしないでもないけど、これで取り敢えずは稼ぎには・・・・・・」

ターニアのマホトーンの効果が切れた！

ターニア「あっ、切れました！」

ターニアはホイミを唱えた！

アテネの傷が回復した！

アテネのマホトーンの効果が切れた！

アテネ「・・・あら」

アテネはヒャドを唱えた！

亡霊に３３のダメージ！！

ファラオ王の亡霊をやっつけた！

それぞれ５２８の経験値を獲得！

ハヤテはレベル１４に上がった！
最大ＨＰが７ポイント上がった！
最大ＭＰが３ポイント上がった！

アテネは１５レベルに上がった！
最大ＨＰが８ポイント上がった！
最大ＭＰが１２ポイント上がった！
アテネはマホトラを覚えた！

ナギはレベル１８に上がった！
最大ＨＰが０ポイント上がった！
最大ＭＰ２０ポイント上がった！
ナギはシャナクを覚えた！

ターニアはレベル１３に上がった！
最大ＨＰが８ポイント上がった！
最大ＭＰが１３ポイント上がった！

ハヤテ「・・・・・・・・・・・・・・・」

アテネ「どうしたのハヤテ？」

ハヤテ「いや、うん・・・・・・なんでもないよ・・・・・・」

ファラオ王「う・・・うぅ？」

ターニア「お二人とも気を付けてください。起き上がりましたよ・・・」

ターニアに云われ前を見ると、倒れたファラオ王の亡霊が頭を押さえながらゆっくりと立ち上がっていたのでハヤテとアテネは再び剣と杖を構える。

ファラオ王「・・・私は一体何を・・・・・・うぅ、そなた達は・・・？」

アテネ「よく解りませんけど、取り敢えず敵意はないようですわね」構えた杖を下ろしアテネが云う。

ファラオ王「此処は城下・・・何故私はこのような所に・・・・・・？」

ハヤテ「何だか様子がおかしくないですか？」

ファラオ王の様子を見ていたハヤテは隣りにいるアテネとターニアに呟く。

アテネ「えぇ、確かに・・・」

ファラオ王「ぐぐぐ・・・・・・いや・・・全て思い出したぞ・・・・・・私は何と云う事を・・・・・・」

ターニア「えぇと・・・ファラオ王・・・さん？」

ファラオ王「そなた達は・・・そうか、そなた達にも迷惑を掛けたな・・・そなた達は我が娘が遣わした冒険者であろう？」

アテネ「えぇ、そうですけど・・・あの、状況が良く掴めていないので説明出来るのなら説明して欲しいのですけど」

ファラオ王「そうだな・・・簡単に説明すれば今までの私は意志を支配されていた・・・だがそなた達のお陰でその支配から解き放たれたと云うわけだ」

ターニア「意思を支配されていた？」

首を傾げながらファラオ王の言葉を繰り返すターニア。

ファラオ王「あぁ、行き成り云われ信じれぬやも知れぬが事実だ。出来れば詳しい話は王宮で皆の前で話したいのだが・・・駄目か？」

ハヤテ「如何しますか？」

アテネ「ふむ、良いのではないですか？・・・完全に信じ切れる訳ではありませんけど、最初の様子からして演技とも思えませんしね」

ターニア「では、お城に戻りましょうか」

ファラオ王「おぉ、信じてくれるか！」

ハヤテ「では、さて・・・お嬢様？まだお起きになりませんか？」

話が纏まったので、すっかり放置されていたナギに歩み寄りお姫様抱っこをしその体を揺する。

ナギ「う～ん・・・ハヤテ？」

ファラオ王「そう云えばこの娘、最初から寝ておったな？」

ファラオ王はニュっとハヤテの肩口から顔を出しナギを覗き込みそう云う。

ナギ「ひっ！ゆゆゆゆゆゆゆゆ！？・・・・・・きゅ～」

ハヤテ「お嬢様！？」

ファラオ王「なんだその娘は！人の顔を見るなり幽霊でも見たように気絶しおって・・・失礼な！」

ハヤテ「いや、貴方実際に幽霊でしょう・・・・・・はぁ、お嬢様は起こさない方が良さそうだな」

こうしてハヤテ達は再びイシスのお城へと・・・・・・

ターニア「・・・・・・あのハヤテ様」

ハヤテ「何ですか？」

ターニア「いえ、その・・・ハヤテ様なら一度に3人位同時にお姫様抱っこ出来―――」

ハヤテ「流石に無理です」

ターニア「・・・・・・うぅ、残念」

・・・・・・お城へと向かった。

第十三話「真夜中のイシス」（後書き）

本当はこの話の前にハヤテの女装オンリーの話があるのですけど、投稿するかしないか悩んだ挙句投稿せずにこちらにしました。

第十四話「ピラミッドの戦い」（前書き）

地震の影響で未だに断水状態ですが、電気は復旧したので更新します。
皆さんの地域は大丈夫ですか？

第十四話「ピラミッドの戦い」

ファラオ王の亡霊を連れ城へと戻って行ったハヤテ達であったが、時間はまだまだ深夜であった為暫しの休憩を経て翌朝一番に女王へと会いに行った。

王の間――――――

ハヤテ・アテネ・ターニア（あれ？何所かでそんな奴を見た様な・・・・・？）

ファラオ王「まぁ、魔物が迷い込んで来る事自体は珍しくもないので何時もの様に兵士達に迎撃させたのだが・・・・・・」

ハヤテ「って、兵士達？」

ファラオ王「私と同じ亡霊の兵士達だ」

ハヤテ「あぁ、そう云う事ですか・・・」

ファラオ王「うむ・・・それで兵士達に迎撃させようと思ったのだがな・・・あの魔物、それよりも早く魔法を使い私の兵士達を掌握しおって・・・流石の私も大勢の敵となった兵士と魔物が相手では成す術もなく意思を乗っ取られてしまったのだ・・・・・」

女王「そのような事が・・・・・・それで、その魔物の目的は何なのですか？」

ファラオ王「あぁ、確か・・・集めた娘達を魔王に差し出すとか云っておったな」

女王「なんと！では一刻も早く助けに――――」

女王は立ち上がり兵士達に指示を出そうとする・・・・・・が、

ターニア「あー！思い出しました！もしかしてその魔物、魔王の影とか云う変な魔物ですよね？」

それを遮る様にターニアがそう声を上げた。

ファラオ王「む？・・・おぉ、確かその様に呼ばれておったな。だが如何してそれを？」

ターニア「やっぱり！」

アテネ「そう云う事ですか・・・と云いますかアレ、原作では雑魚敵のくせに出過ぎじゃないですか？」

ハヤテ「ま、まぁ、それは置いておいて・・・ですが、そう云う事ならば一先ずは大丈夫そうですね」

女王「・・・どう云う事ですか？」

女王は再び玉座に腰かけ疑問の表情で問う。

ハヤテ「いえ、この国に来る前に色々とありましてね・・・その色々の中でその魔王の影に会って既に倒しているのですよ」

ファラオ王「なんと！あの魔王の影を倒したと！それが本当ならば全員無事に・・・いや、待てよ・・・・・・」

ファラオ王は歓喜の声を上げた・・・と思ったら何かを思い出し再び険しいに戻る。

アテネ「如何したのです？」

ファラオ王「いや、もう一つ思い出したぞ・・・連れ攫った娘達を

見張る為に部下として魔物がもう一体いた筈だ。それを倒さねば娘達を救い出せぬぞ」

女王「その魔物は強いのですか？」

ファラオ王「うむ、まず城の兵士では歯が立たぬであろうな・・・・・・」

アテネ「そう云う事ならば私達に任せてもらいましょう。此処まで知って放ってはおけませんわ。いいですよねハヤテ、ターニアさん？」

ハヤテ・ターニア「えぇ」

アテネの問いに二人は笑顔で答える。

女王「おぉ、任されてくれますか！では勇者様、度々ですがお任せいたします」

ファラオ王「勇者様？何処に勇者様がおるのだ？」

ファラオ王は辺りを見回しそう呟く。

女王「何処にと云われましても・・・・・・お父様のお隣にいるハヤテ殿が勇者様ですよ？」

ファラオ王「な、何！？それは真か！？」

ハヤテの方を心底驚いたように振り向く。

ハヤテ「え、えぇ、一応・・・・・・」

そんなファラオ王にハヤテは若干引きながら答える。

ファラオ王「何と・・・私はてっきり格好からして遊び人とばかり・・・・・・いやはやこれは失礼したな勇者殿」

ハヤテ「いえ・・・この格好で勇者と思える方が凄いですよ・・・・・・」

アテネ「そう云えば、貴方は何時までその格好をしているつもりですの？」

ターニア「ですねぇ、目の保養になるので全然構わないのですけど、もう着ている意味はないですよね？」

ハヤテ「誰の性で脱げないと思っているんですか？貴女達が呪われた衣装なんて着せるから脱げなくて困っているんじゃないですか」

ハヤテはジト目＋珍しく怒った表情で二人に云う・・・が。

アテネ「さーて、早速ですけど攫われた人たちを行きましょうか！」

ターニア「ファラオ王さん！道案内頼みましたよ！」

ファラオ王「うむ。任せておけ」

そんなハヤテを無視し、二人はファラオ王を連れ既に王の間を出ようとしていた。

ハヤテ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

女王「えぇと、頑張ってください勇者様。その・・・その衣装似合っていますよ？」

ハヤテ「あはは・・・・・・ありがとうございます・・・」

女王としては慰めの言葉であったのだろう・・・が、ハヤテには結構な追い打ちだった・・・・・・

ファラオ王の案内の元馬車を進め、ハヤテ達はイシスの国より北に位置するピラミッドへと辿り着いた。

ピラミッド――――――

いるとか・・・なんてアンバランスな・・・・・・って云うかどんな状況？

ハヤテ「そのアンバランスな状況を創ったのはアンタだろ・・・つーか誰がガールだ」

ターニア「皆さん時々あの様に変な方向に話し掛けてますよね？あれ、本当に何なんですか？」

アテネ「貴女も何時か解る時が来ると思います。ですから今は気にしない事ですわ。そんな事より何時までもこの入口にいないで、早く中に入りましょう」

ファラオ王「うむ、では参ろう」

ピラミッド・1階。

アテネ「ふむ、中は案外涼しいのね」

ピラミッドの中に入り、薄暗い通路を歩くとアテネが一番にそう呟いた。

ファラオ王「当然だ。此処は私の墓なのだからな。私が過ごし易い様に設計されている」

ハヤテ「過ごし易いって・・・幽霊にもそう云う感覚があるのですか？」

ファラオ王「ん？無論ない」

ガクッ

ハヤテ「無いんですか・・・・・・」

ファラオ王「なぁに、気分だよ気分」

ターニア「あれ？ファラオ王さん、この先が十字路になってますけど・・・」

先頭を歩いていたターニアは、分かれ道が見えて来た為後ろを振り向き立ち止まりファラオ王に尋ねる。

ファラオ王「あぁ、此処は真っ直ぐだ」

ターニア「はーい」

進むべき道筋を聞き、ターニアは再び歩を進め始めた・・・・・・のだが。

ファラオ王「む？そう云えばあの十字路には・・・・・・」

ガタンッ

ターニア「きゃ！？」

アテネ「えぇ！？」

ハヤテ「うわっ！？」

ファラオ王「あぁそうそう、そこには落とし穴が気を付けろよー」

ハヤテ「・・・そう云う事は早く云ってください」

落とし穴の入り口から見下ろす形で云うファラオ王に何とか落ちずに縁に捕まったハヤテが答える。

ファラオ王「すまんすまん。私は基本浮いてるからすっかり忘れてた」

ハヤテ「はぁ・・・あっ！アーたん、ターニアさんは！？」

アテネ「大丈夫よ。私が掴んでるわ」

ターニア「すみませぇん・・・・・・」

ファラオ王「おぉ、全員落ちずに済んだのか。まぁ、落ちたとしても白骨死体くらしかないがな！はははは！」

ハヤテ「笑い事じゃないですよ・・・・・・よっと！」

ドサッ

ハヤテは二人を一気に上に持ち上げ、自分も穴の外に出る。

ターニア「ふぅ・・・死ぬかと思いました」

アテネ「次からは事前に教えてくださいね」

ファラオ王「うむ。任せておけ」

ハヤテ「では、気を取り直して行きましょうか」

胸を叩くファラオ王を見て、ハヤテ達は再々度歩を進め始めた・・・・・・が、やはり。

ガタンッ

ターニア「きゃ！？」

アテネ「えぇ！？」

ハヤテ「うわっ！？」

ファラオ王「すまぬ。もう一個あったの忘れてた」

その後も再三落とし穴に落ち・・・・・・・・

ターニア「わぁ！宝箱ですよ！ファラオ王さん、これ何が入ってるんですか？」

ファラオ王「ん？えぇと確かその宝箱には・・・・・・」

ガチャ

ターニアは宝箱を開けた！なんと！宝箱は人食い箱だった！

人食い箱「キシャアアァァァァ！！」

ターニア「きゃあああぁぁぁぁ！？」

ファラオ王「あぁ、思い出した！賊対策の為の人食い箱だ。くれぐれも開けるなよ」

ターニア「もう遅いですよーーー！！」

散々人食い箱に襲われる・・・・・・・・・・

等々、ハヤテ達は悉くピラミッド内のトラップに引っ掛かりながら奥へと進んでいった。

ピラミッド・４階。

ダダダダダダダダダッ！！！！！！

ハヤテ「一体何なんですかこの状況はーーーーっ！！！！？？？？」

そうハヤテが叫ぶのは、ミイラ男・ママミー・大王ガマｅｔｃ…と云うピラミッドオールスターの大軍に追われている状況である。

ファラオ王「私にも解らん！！！」

アテネ「貴方が解らなかったら他に誰が解ると云うのですか！！？？」

ファラオ王「えっ？あー・・・あっ！作者！！」

ハヤテ・アテネ「そう云う問題じゃないです！！！」

まぁ、知ってますけどね。

モンスター達「かえせー・・・かえせー・・・」

ターニア「な、何か返せって云ってますけど!!??」

ハヤテ「返せって・・・僕達何か盗りましたっけ!?」

アテネ「そんな暇ありませんでしたわ!そもそも開けた宝箱は全て人食い箱でしたし!!」

ターニア「私も位置と縦書き的には右に同じ!!横書き的には上に同じです!!」

ハヤテ「と云う事は・・・・・・」

走りながら三人はファラオ王に視線を向ける。

ファラオ王「わ、私か!?」

アテネ「流れ的に貴方が一番怪しいですわ!!」

ファラオ王「いや、だが私の持ち物と云えば・・・・・・薬草に毒消し草に祈りの指輪位だが・・・」

ターニア「本当ですか!?」

ファラオ王「うーむ・・・後はこの黄金の爪しかないぞ」

そう云うファラオ王の手には名前の通りの黄金に輝く爪が。

ハヤテ「黄金の爪？そんな物何時の間に！？」

ファラオ王「ん？あぁ、さっきそこに落ちてたから拾ったんだ。これは呪われたアイテムでな・・・持っているとモンスターを引き寄せる代物なのだ。だから地下に厳重に封印しておいたのだが・・・一体誰が持ち出したのか・・・・・？」

ハヤテ・アテネ・ターニア「それだあああぁぁぁぁ！！！！！」

ファラオ王「えぇ！？」

ハヤテ「貴方がそれ持ってるから追われてんですよ！！貸してください！！」

ファラオ王「なっ、何をするのだ！？」

ハヤテはファラオ王から黄金の爪を奪い取ると走るのを止め後ろを振り向き・・・・・・

ハヤテ「そおい！！」

それを思い切りモンスター達の後方に投げつけた。

モンスター達「！？」

ダダダダダダダッ！！

モンスター達は後方に投げられた黄金の爪を追って走り去って行っ

た。

ハヤテ「はぁはぁはぁ・・・追ってこなくなった・・・・・・」

ターニア「はひぃ・・・疲れましたぁ・・・・・・」

アテネ「本当に・・・無駄な体力を使いましたわ」

ファラオ王「ふむ・・・まぁ、これも試練の一つだと思えば・・・・・・」

ハヤテ「何云ってんですか・・・貴方がいなければこんなに苦労してませんよ」

アテネ「確かに・・・今のは完全に貴方のせいでしたわね」

二人はファラオ王を睨みつける。

ファラオ王「うっ・・・そ、そんな事よりも！ほら、走っていて気付かなかったかもしれないが此処が最上階への階段を守る扉だ！！」

ターニア「あっ、そう云えば確かに行き止まりですね此処・・・・・・でも、追われている原因が解らなかったら、私達どうなってたんでしょうね？」

ハヤテ「ファラオ王さんの仲間になってたんじゃないですか？」

ターニアの疑問に相変わらずファラオ王を睨みながらハヤテが答える。

ファラオ王「うっ・・・・・・・」

アテネ「はぁ・・・まぁ、過ぎた事を何時までも引き摺っていてもしょうがありませんわ。それよりも、この扉はどうやって開けるのですか？」

ファラオ王「そ、そうだな！確か、横の壁にボタンがあるからそれを押すのだ。押すと隠し扉が開き、その中に宝箱がある。その中にある魔法の鍵がこの扉を開ける鍵になっている」

ドサッ

ハヤテ「これですか？」

ファラオ王が説明を終えるとほぼ同時にハヤテが大きな宝箱を皆の前に置く。

ファラオ王「早いな・・・・・・」

アテネ「と云うか、開けても大丈夫なのですか・・・？さっきも云いましたけど今まで開けてきた宝箱は全部人食い箱だったのですよ？」

ファラオ王「あぁ、これは本当に心配ない。何も出ない筈だ」

ハヤテ「では、開けますよ」

カチッ

ハヤテは宝箱を開けた！

すると行き成り蓋の部分が真っ二つに割れ飛び出しそれを手の様にし、真っ赤な長い舌を出した骸骨が中から半身だけ出し宝箱ごと浮き上がる。

なんと！宝箱はトラップボックスだった！

ハヤテ「ちょっとファラオ王さん！？何も出ない所か、今までの遭ったモンスターの中で一番ヤバそうなのが出てきましたけど！？」

ファラオ王「そ、そんな筈は・・・あっ！そいつだ！そいつがあの魔物の手下の魔物だ！」

ターニア「えぇ！？そんなに行き成り云われても準備も何も出来てませんよ！？」

アテネ「ですがあちらは待ってはくれそうにありませんわね・・・」

トラップボックス「キシャアアアアアアアア！！！！」

トラップボックスが現れた！

ハヤテ
ＨＰ１２４
ＭＰ　５３
勇　　１４

アテネ
ＨＰ７２
ＭＰ９９

魔戦１５

ターニア
ＨＰ　５６
ＭＰ１１６
僧　１３

ファラオ王
ＨＰ　０
ＭＰ１２４
しに

ハヤテ「あっ、貴方も戦うのですか？」

ファラオ王「うむ、何と云うかこのまま何もしないと本当に唯の足手纏いになるからな・・・・・・」

アテネ「自覚があって良かったですわ」

トラップボックスの攻撃！

ファラオ王に３４のダメージ！！

しかしファラオ王は既に死んでいる！

ハヤテはデインを唱えた！

トラップボックスに４２のダメージ！！

アテネはヒャドを唱えた！

トラップボックスに３２のダメージ！！
ターニアはバギを唱えた！
トラップボックスに２３のダメージ！！
ファラオ王はマヌーサを唱えた！
トラップボックスには効かなかった！
トラップボックスの攻撃！
痛恨の一撃！　ファラオ王に９８のダメージ！！
しかしファラオ王は既に死んでいる！
ハヤテ「貴方・・・中々便利な体ですね」
ファラオ王「まぁ、元から死んでるからな。多少は痛いけど」
アテネ「ふむ・・・・・・」
ハヤテのはやぶさの如き高速の２回攻撃！
トラップボックスに合計３４のダメージ！！
アテネはイオを唱えた！
トラップボックスに２３のダメージ！！

ターニアはバギを唱えた！
トラップボックスに１９のダメージ！！
ファラオ王はメダパニを唱えた！
トラップボックスには効かなかった！
トラップボックスの攻撃！
ファラオ王を攻撃しても無駄だと解ったトラップボックスは今度はアテネに襲いかかる。
アテネ「！」
が、それを事前に察知したアテネは素早くファラオ王の背後に移動する。
ファラオ王「えっ？」
ミス！アテネはファラオ王を盾にして攻撃をかわした！
代わりにファラオ王に３５のダメージ！！
しかしファラオ王は既に死んでいる！
アテネ「よし！上手くいきましたわ♪」
満足げにアテネは頷く。

ファラオ王「よしじゃねぇよ！何私を盾にして攻撃をかわしてるんだ！！」

アテネ「いいじゃない、どうせ貴方は死んでいるのだし。何の問題もありませんわ☆」

ファラオ王「あるわ！さっき少し痛いって云っただろ！」

ターニア「まぁまぁ落ちてくださいファラオ王さん。今は戦闘中ですから、文句なら後で云いましょう」

ファラオ王「むぅ・・・そうであるが・・・解った此処は引き下がろう」

ハヤテはデインを唱えた！

トラップボックスに３４のダメージ！！

アテネの攻撃！

トラップボックスに２１のダメージ！！

ターニアの攻撃！

トラップボックスに１４のダメージ！！

ファラオ王はラリホーを唱えた！

トラップボックスには効かなかった！

トラップボックスはヒャダインを唱えた！
打撃攻撃自体が無駄だと解ったトラップボックスは、自身が唱えられる呪文で最大級の呪文を唱えてくる。
ハヤテ・アテネ・ターニア「！」
ファラオ王「！？」
ミス！ハヤテはファラオ王を盾にして攻撃をかわした！
ミス！アテネはファラオ王を盾にして攻撃をかわした！
ミス！ターニアはファラオ王を盾にして攻撃をかわした！
代わりにファラオ王に合計２５２のダメージ！！
しかしファラオ王は既に死んでいる！
ファラオ王「ぐふっ・・・・・・お前達、流石にこれは堪えたぞ」
ハヤテ「でも別に消えたりはしてないから大丈夫じゃないですか？」
ファラオ王「大丈夫なものか・・・危うく成仏しかけたわ！」
ターニア「死んだ人間の魂が現世に留まる方がおかしいと思いますけど・・・・・」
アテネ「ですわね。どうせならそのまま成仏しても良かったのでは

？」

ファラオ王「お前達は鬼か・・・・・・」

トラップボックス「キシャアアアァァァァァ！！！！！」

トラップボックスは攻撃が当たらず怒っている！

トラップボックスのテンションが5上がった！

ハヤテ「どうするんですか・・・めちゃくちゃ怒ってますよ・・・・・・」

ファラオ王を見ながらハヤテは云う。

ファラオ王「いや・・・これは私のせいじゃないだろ」

ターニア「あっ！そうだどうせなら・・・・・・」

トラップボックスはヒャダインを唱えた！

ハヤテ・アテネ「！」

ファラオ王「またか！？」

三人は再びファラオ王の背後に隠れる。

光の壁が呪文を跳ね返した！×４

トラップボックス「！！？？」

トラップボックスに合計４１２のダメージ！！
トラップボックスをやっつけた！
ハヤテ達はそれぞれ８６２の経験値を獲得！
ハヤテはレベル１６に上がった！
最大ＨＰが１２ポイント上がった！
最大ＭＰが８ポイント上がった！
ハヤテはギラを覚えた！

アテネは１７レベルに上がった！
最大ＨＰが１１ポイント上がった！
最大ＭＰが１８ポイント上がった！
アテネはメラミを覚えた！

ターニアはレベル１５に上がった！
最大ＨＰが１５ポイント上がった！
最大ＭＰが１２ポイント上がった！
ターニアはマホトーンを覚えた！
ターニアはベホイミを覚えた！

トラップボックスは宝箱を落としていった。
なんと、魔法の鍵を見つけた。
ハヤテは魔法の鍵を手に入れた！

ファラオ王「ん？最後は一体何が起きたのだ？」

ファラオ王は予想していた痛みが来ない所か、攻撃を仕掛けてきた

筈の相手が倒れた事に首を傾げる。

ターニア「上手くいきましたね。実はこっそりとファラオ王さんにマホカンタをかけておいたのですよ！」

ファラオ王「成程・・・では奴は自滅したようなものか」

ターニア「そうなりますね」

ハヤテ「流石はターニアさんですね。あの中で冷静な判断で適切な行動が取れるのは」

ターニア「えへへ♪そんな大した事じゃありませんから誉めていただいても・・・そんな事よりも私はハヤテ様に今夜愛して頂ける方が――って痛い！またですかぁアテネさん」

アテネ「確かに功績は認めますけど調子に乗らない事ですわ」

ハヤテ「あははは・・・では、トラップボックスも倒しましたし、早く攫われた人たちを助け出しましょう」

こうして無事トラップボックスを倒したハヤテ達は、ファラオ王に攫われピラミッドの頂上に幽閉されていた人々を無事に救い出し、イシスの国へと戻って行った。

ハヤテ「・・・あれ？そう云えば何か忘れているような・・・・・・？」

ターニア「何かって何ですか？」

ハヤテ「いえ、それが思い出せないから何か何ですよ」

アテネ「確かに・・・何か忘れていますわね」

ハヤテ・アテネ・ターニア「ん～？」

さぁ、読者の皆さんは気づきましたか？この話のおかしな部分に。

まぁ、気付かない人なんていらっしゃらないと思いますが、解らない方はもう一回読んでみてください。

あっ、文が下手とかじゃないですからね？

では、ハヤテ達の疑問答えは次回明らかに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1753p/

ハヤテでドラゴンクエスト?

2011年10月8日11時08分発行